

概説・ベルクソンの形而上学(4)

—カント形而上学との関係性を基本視座として—

坂 本 武 憲

目 次

- 1 はじめに
- 2 著作「意識の直接的所与に関する試論」(1889)の検討
 - I カント形而上学の大要(参考)
 - II 本著作の主要な問題関心
 - III 心理学的な諸状態の強度について
 - (1) 延長量と強弱量(強度)の区別の曖昧性
 - (2) 「広げられないもの」の有する二種類の強度
 - (3) 外的要因により表象される「努力」の強度
 - [A] 身体的努力に固有な強度の存否
 - [B] 精神的努力に固有な強度の存否
 - [C] 強烈な諸感情に固有な強度の存否
 - (4) 単純な状態に該当する感情・感覚の強度
 - [A] 情緒的な感情・感覚の場合
 - [B] 表象的な感覚の場合
 - (5) 小 括
 - IV 意識の諸状態の数多性

—持続の理念—

 - (1) 数の理念について
 - [A] 諸単位の集合としての数
 - [B] 数の組成単位としての数
 - [C] 二つの数多性の区別
 - [D] 物質の非貫通性に基づく量の測定
 - [E] 精神上の所為(感覚・感情・考え)の数の象徴的表示
 - (2) 精神上の所為(感覚・感情・考え)の質的数多性
 - [A] 空間の理念の理論的解明
 - [B] 時間の理念の理論的解明

- (3) 質的数多性と数的数多性の区別の重要性
- (4) 質的数多性を数的数多性で展開する可能性
 - [A] 外的客体の感覚における一連の同一的な諸項の場合
 - [B] 我々の内的な私・自己の意識における場合
- (5) 基本的私・自己を見出す意識の分離と確立

(以上142号)

V 意識の諸状態の有機体化

—自由—

- (1) 自由を論証する仕方について
- (2) 機械論とダイナミズムにおける自由の概念
- (3) 自由に対する決定論の立場からの反対
 - [A] 物理学的決定論の仮説
 - [B] 心理学的決定論に立脚する観念連合論
- (4) 観念連合論に基づく決定論の疑問点
 - [A] 決定論における私・自己の機械論的思考
 - [B] 我々に存する性格・人格を変える自由
- (5) 決定論と反対説「自由な選択意思論」の批判的考察
 - [A] なされた行為のある時点での自由の存否
 - [B] 将来の行為における自由の存否
 - [C] 空間と時間の混同による三つの幻想
- (6) 天文学的な時間と心理学的な時間の相違
 - [A] 天文学的時間が持続を考慮しない理由
 - [B] 心理学的時間における持続の役割
- (7) 因果性の法則に対する自由の擁護
 - [A] 心理学的事実の特性の確認
 - [B] 原因の概念の諸考察
- (8) 自由の定義の不可能について

VI 結 論

- (1) これまでの考察の要約
- (2) 自説に基づくカント形而上学の評価

VII 若干の経過的コメント

(以上143号)

3 著作「物質と記憶」(1896年)の検討

I 本著作の全体を貫く姿勢

II 本著作の主要な方針

- (1) 本著作が前提とする物質理論
- (2) 本著作の考察方法

Ⅲ 表象のための諸様態（イマージュ）の選定について

—身体の役割—

- (1) 我々と客体の様態（イマージュ）との関係
 - [A] 客体認識における我々と客体の様態（イマージュ）との関係
 - [B] 実践的行為での我々の身体と客体の様態（イマージュ）との関係
 - (2) 実在の様態（イマージュ）上での宇宙と我々の身体の関係
 - (3) 我々の身体とそれを取り囲む諸客体との関係
 - [A] 我々の身体が果たす役割の観点からの考察
 - [B] 我々の神経組織が果たす役割の観点からの考察
 - (4) 脳と神経組織の様態（イマージュ）が教えるそれらの機能—我々の知覚との関係で—
 - [A] 外的世界の知覚における脳と神経組織の機能的限界
 - [B] 脳と神経組織の運動が果たす反作用の準備機能
 - [C] 宇宙の知覚と脳・神経組織との関係の誤解原因
 - (5) 「宇宙」と「宇宙の知覚」の共存について
 - [A] 両者の対比的提示
 - [B] 両者の体系間に維持される関係についての哲学的理論
 - [C] 宇宙と宇宙の知覚の体系が有する自足性の確認
 - (6) 外的知覚一般と我々の行為との関係
 - [A] 知覚・純粹認識・不確定な行為について
 - [B] 意識的知覚の可能性について
 - [C] 不確定な行為について意識的知覚が生ずるメカニズム
 - [D] 意識的知覚が成立しうる前提の提示
 - (7) 所与としての客体の様態（イマージュ）と知覚の成立
 - [A] 知覚は客体の様態（イマージュ）からの導きで成立するとの論証
 - [B] 心理学者による記憶の機能を無視した誤った見解
 - [C] 知覚の成立と外的客体からの衝撃の神経組織による伝達
 - [D] 知覚と我々の動的活動力との関係
- (以上144号)
- (8) 知覚と感覚・感情との関係
 - [A] 外的世界を内的感覚・感情の投影とする理論の不可能
 - [B] 外的世界からの衝撃による感覚・感情の成立説の優位性
 - [C] 知覚と感覚・感情における身体的作用の相違
 - [D] 従来理論の根本的変革の必要性
 - (9) 知覚と記憶の関係について
 - [A] 知覚と記憶を結ぶ意識の役割
 - [B] 現実の直観の基礎（知覚）と以前の直観の基礎（記憶）

[C] 「純粹知覚」と「純粹記憶」の性質上の相違

[D] 「純粹記憶」の考察が精神について切り開く展望

IV 諸様態（イマージュ）の蘇生（reconnaissance）について
—記憶と脳—

(1) 経験により検証されるべき記憶に関する諸命題

[A] 三つの命題の定式化

[B] 第一命題（二つの形式の記憶）の詳細な説明

[C] 第二命題（記憶の蘇生一般）の詳細な説明

[D] 第三命題（「様態－記憶」から運動への移行）の詳細な説明

（以上本号）

3 著作「物質と記憶」（1896年）の検討（承前）

III 表象のための諸様態（イマージュ）の選定について（承前）

—身体の役割—

(8) 知覚と感覚・感情との関係

[A] 外的世界を内的感覚・感情の投影とする理論の不可能

意識的知覚は、不確定な（自発的選択可能性ある）可能的行為のために、その必要な範囲で生ずるとの理論は、私・自己から身体へ、そして身体から他の物体へと、知覚を延ばしてゆく思考様式に馴染みやすいものであり、実際にもその方向での見解（非延長的な感覚が空間に投影されて物体の知覚となるなどの見解）がみられる。著者は既に、このような見解を不可解であるとして排斥し、この意識的知覚の前提となる純粹知覚は、外的な諸様態（イマージュ）という周辺から、我々の身体という中心に至るとする方向での自説を、強く主張してきたのであるが、この点は、カントの形而上学を基礎に、我々の対象認識および自由な行為の実現について、独自の二元論哲学の体系を樹立しようとする著者にとって、揺るぎのないものとしておく必要があった。そこでまず、子供の発達との関係を端緒として、

その点のより深い検討が開始される。

「幼年期を研究した心理学者達は、我々の表象が非個人的であることから始まるのを、良く知っている。表象が我々の身体をその中心として採用し、そしてそれが我々の表象となるのは、少しずつそして諸々の帰納によってである。この作用のメカニズムは他方で、理解するのが容易である。私の身体が空間において移動するに応じて、他の様態（イマージュ）のすべてが変わる：反対に身体は不変なままである。私はそれゆえ身体を、私がすべての他の様態（イマージュ）を（周辺から一筆者）そこに関係付けるであろう、ある中心とするはずである。私のある外的世界への信頼は、私が私の外へ非延長的な諸感覚を投影することからは生じないし、生じえない。：これらの感覚はいかにして延長をえるのか、そして私はどこから外部性の観念を引き出しうるのだろうか？しかしもし私が、経験がそのことを証明しているように、様態（イマージュ）の総体が最初に与えられていることに同意するならば、私は非常に良く、私の身体がこの総体において、いかにして特権的な地位を占めるに至るのかについて理解する。そして私はまた、その際には初めには私の身体と他の物体の区別に過ぎないところの、内的なものとの外的なものとの観念が、どのようにして生ずるのかも理解する。実際に、人が通常的にそうするように、私の身体から出発せよ。；あなた方は、私の身体の表面で受容した諸印象、私の身体にだけ関係する諸印象が、私にとって独立な諸客体となるだろうとは、そしてある外部世界を形成するだろうとは、決して理解させるに至らないだろう。反対に、私に諸様態（イマージュ）一般を与えなさい。；私の身体は必然的に、遂にそれらの真ん中で、別個なあるものとして描かれるであろう。なぜならそれら諸様態は絶え間なく変わり、そして私の身体は変わらないままだからである。かくして内的なものとの外的なものとの区別は、部分と全体のそれに帰着する。最初に様態（イマージュ）の総体が存在する。；この総体の内に、関係する諸様態（イマージュ）がそれに対して反映されると

ころの、行為の中心が存在する。；諸知覚が生じそして諸行為が準備されるのは、そのようにしてである。私の身体はこれらの知覚の中心に描かれるものである。；私の人格は、これらの行為を、身体へともたらす必要のある存在 (être) である。もし人がそのようにして、子供がそうのごとく、直接の経験と常識が我々をそこへと招くごとく、表象の周辺から中心に進むならば、諸事物は明確化する。反対に、もし人が諸理論と共に、中心から周辺へと進むように主張するならば、すべてが曖昧化しそして諸問題が増加する。それゆえその際に、人為的に部分部分で、延長のない諸感覚—いかにしてそれらが広がりある表面を形成するに至るのかも、いかにしてそれらは次に我々の身体の外に投影されるのかも人が理解しないところの—でもって構築されたある外的世界の理念は、どこから生ずるのか？ 実際には私は初めから、物的世界一般に身を置いているというのに、この行為の中心を制限し、そしてそのようにしてすべての他のものから区別するために、人はどうして私の私・自己から私の身体に、次に私の身体から他の物体に進むように望むのか？ 我々の知覚の最初における非延長的な性格への信頼には、人は見出すであろう、我々が我々の外に純粋に内的な諸状態を投影するという考えに集められた多くの幻想が、多くの誤解が、悪く提起された問題への多くのちぐはぐな解答が、存在しており、それらを我々は一挙に解明すると主張しえないであろう。我々がより明確にこれらの幻想の背後に、分割しえない広がり、同質な空間との形而上学的な混同、純粋な知覚と記憶との心理学的な混同を示すにつれて、解明が少しずつなされるであろうことを希望する。しかしそれらは加えて、我々が今からその解釈を正すために示しうる、現実的な諸事実に帰着するものである」⁽²⁰⁶⁾。

(206) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.195 et suiv.

[B] 外的世界からの衝撃による感覚・感情の成立説の優位性

(a) 我々の別種な諸感覚の調整と一致について

そこで著者は、周辺から中心へと向かう自説（まず諸客体からの衝撃により、それらが仕向ける仕方ですれらの諸様態・イマージュを純粋知覚とし、その後我々のそれらに対する身体の行為との関係で、意識的知覚とするとの説）と、それとは反対の方向を採る理論（我々が我々の外に純粋に内的な諸印象を投影するという考え）が、どのような現実的な諸事実に帰着するか、三つの事実において示している。これらの事実の第一は、我々の感覚は教育を必要としているということに関係する。視覚も触覚も直ちにはそれらの印象を位置付けるには至らない。一連の比較と帰納を必要とし、それらによって我々は我々の諸印象を少しずつ互いに整序する。中心から周辺に向かう理論はそこから、本質的には非延長的で、並置されることで広がり構成するであろう諸感覚の理念へと跳ぶ。しかし著者が身を置く仮説においても、確かに諸感覚は同様に教育を必要とするが、それは諸感覚が事物の知覚を構成（生成）するためではなく、単に客体からの衝撃で成立した諸感覚が、それらの間で一致するためである。ここには、すべての様態（イマージュ）の真ん中に、人が自己の身体と呼ぶ—そしてその潜在的作用が、周りの諸様態（イマージュ）の、それら自体上での外観的反射で表示される関係にあるところの—ある様態（イマージュ）が存する（前掲（6）・[C]・(a) および（7）・[A]・(a) 参照）。自己の身体にとっての可能的な行為の種類と同じだけ、他の物体にとっての異なった反射のシステムが存在するだろう。そしてこのシステムの各々が、自己の感覚の一つ一つに対応して存しているであろう。従ってまた、我々の異なった諸感覚で受容された、同じ客体の諸性質の各々が、私の活動のある方向とある必要を象徴している。

いまや、中心から周辺に進む理論が見るように、我々がなすこの意識的知覚にあっては、ある物体の私の様々な感覚によるこれらのすべての知覚

が、相集まってこの物体の完全な様態（イマージュ）を与えているのだろうか？おそらくそうではない。なぜなら、意識的知覚は選択することを意味し、そして意識は何よりもまず、実践的な識別から成る。我々の様々な感覚が与える、同じ客体の様々な意識的知覚は、相集まってその客体の完全な様態（イマージュ）を構成しない。それらは我々の必要のいわば多数の欠如を測定する諸間隔（客体における我々に必要なもの・様態に対して、実践的に向けられる感覚・知覚は、その客体における我々に必要でないもの・様態には向けられないから、この後者の様態に関して生ずる諸間隔）によって互いに分けられたままであるだろう。感覚のある教育が必要なものは、これらの間隔を補填するためである。この教育は、我々の感覚をそれらの間で調和させ、それらの所与の感覚に身体の必要の非連続性そのものによって破られた連続性を確立し、最後にその客体の全体を、おおよそで再構築すること（純粹知覚を再構築すること）を目的とするものである。著者の仮説においては、感覚の教育の必要性はそのように説明される。

この説明を先のものと比較すると、第一の説明においては、視覚の非延長的な諸感覚が、触覚と他の諸感覚の非延長的な諸感覚と、それらの総合によってある物的な客体の理念を与えるために、和解するであろう。しかし第一に、これらの諸感覚がいかにして延長を獲得するのだろうか、殊に一度正当に延長が獲得されると、それらの内のこれが空間のこの点に対して有するはずの事実上での優先性は、いかに説明されるのかを、人は理解しない。そして続いて、人はいかなる幸せな一致によって、いかなる予め確立された調和に従って、これらの異なった種類の感覚がある安定した、いまや凝固されたある客体を形成するために、私の経験と他のすべての人のそれに共通なある客体を形成するために、他の諸客体に対して、人が自然の諸法則と呼ぶ曲げられない諸規則に服する、ある客体を形成するために、一緒に整序されるのかを問うる。

反対に第二の説明においては、我々の異なった感覚の諸所与は、我々に

においてよりはむしろ、それらにおいて知覚された事物の性質である。捨象のみがそれらを分けるのに対し、それらが一緒になるのは驚くことではない（前掲（6）・[D]・（b）参照）。第一の仮説においては、物的な客体は、我々が知覚するものでは全くない。人は一方で、そちらの方から知覚としうる諸性質を伴って認識の客体が生ずるところの、意識的な原理を置くだらうし、他方では人がそれについて何もいいえないところのある物質を置くだらう。第二の仮説においては、物質の段々と深められる認識が可能である。知覚されたあるものをそれから切り離すどころか、我々は反対にすべての感じる性質を比較して、それらの親和性を見出し、我々の必要が破っていた連続性をそれらの間に確立するはずである⁽²⁰⁷⁾。

（b）身体が有する現実的作用としての感覚・感情について

著者の理論が帰着する第二の現実的事実は、諸神経の各々には、それに固有な信号・言語としての諸感覚を生じさせるといわれる、「諸神経の特別なエネルギー」と呼ばれてきたものに関係する。我々は、異なった神経を有し、その神経ごとに異質な感覚・知覚を一例えば視覚神経からは視覚的感覚・知覚を、聴覚神経からは聴覚的感覚・知覚を一もつのは疑いえない。しかしそれらに反応して我々の身体がなす空間における諸運動は、同質なものである。するとこの異質な感覚・知覚から、しかし空間での同質な運動へと進展するプロセスだけに着目すると、これらの感覚・知覚は確かに異質的であるが、しかし非延長的な信号として、最後には同質な機械論的諸運動を帰結させるのであるから、一方で感覚・知覚そのものは異質的だがともかく非延長的であり、他方でそれが進展して表す運動は、空間における同質なものであるとして、かかる進展のプロセスを、一緒になることの不可能な二つの部分に分割するとの考えが生ずる。果して感

(207) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.197 et suiv.

覚・知覚のこのような位置付けは、そもそも正しいのだろうか？「人は、視覚神経のある外的な衝撃による、あるいは電氣的な流れによる刺激は、ある視覚的な感覚を与えるだろうということを、この同じ電氣的な流れは、聴覚神経あるいは舌咽神経に適用されて、ある味や音を知覚させるであろうことを知っている。これらの非常に特別な事実から、以下の二つの非常に一般的な法則、同じ神経上で働く異なった諸原因は、同じ感覚を惹起する、そして異なった神経上で働く同じ原因は、異なった感覚を生じさせる、へと移る。そしてこれらの法則そのものから、人は我々の諸感覚は単に信号であり、各感覚の役割は空間において成就される同質で機械論的な諸運動を、その固有な言語で表すことであると、結論を導く。そこから最後に、我々の知覚を、今や一緒になることが不可能な、二つの別個な部分に分割するという考えが生ずる。：一方で空間における同質的な諸運動、他方で意識における非延長的な諸感覚」。

しかし著者は、人がここでいう諸感覚・知覚とは、自説が前提とする我々の身体の外にある客体から、我々によって知覚された様態（イメージ）なのではなく、むしろ我々の身体そのものに局所化された諸感情（*affection*）であることに注目させる。そしてこのような意味で理解される感情と、身体の外にある客体としての諸様態（イメージ）との間には、後出のようにそれらは別異の性質のものだが、そのような感情はまず身体の外にあるその客体の諸様態（イメージ）によって生じさせられているという、密接な関係性を承認する自説によれば、以下の異なった理解が可能であるとする：我々の身体の性質と用途からみて、その身体上の感覚的な要素の各々は、身体の客体に対する潜在的な作用（その客体が脅かす危険を回避しえたり、それが約束する利益を引き出しえたりするまだ潜在的な作用）と同じ種類となるはずなのであり、その結果として身体が前述の潜在的な作用を実現する前に、その作用に関連して身体に既に現実的な苦痛などの諸感情が生じうること、そのようにして感覚的諸神経の各々は、感

覚のある特定の様式に従って振動し、客体の様態（イマージュ）とは別異な性質の、身体における様態（イマージュ）を、前者の様態（イマージュ）との密接な関係性において形成することが、理解されるであろう。そしてその説示を、次の第三の事実の考察にかからしめる⁽²⁰⁸⁾。

（c）広がり^を非延長的な状態が獲得する特性とする不合理

第三の事実として取り上げられるのは、前記の知覚を身体の内^に生じた非延長的な諸感覚（感情）の外部化とする誤った論証（見方）そのものに関係する。その論証は、人は感じ取れないほどの程度を通じて、空間を占める表象的な状態から、広がりがないように思われる感情的な状態へと、連結して移行させようということを根拠として引き出される。そこから人は、あらゆる感覚の自然で必然的な非延長性を結論し、広がりが感覚に付け加わり、そして知覚のプロセスは内的な諸状態の外部化から成ると結論する。心理学者は実際に、彼の身体から出発し、そしてこの身体の周辺で受容した諸印象が、彼には物的な宇宙全体の再構築に十分であるように思われるので、彼が最初に宇宙を帰するのは、彼の身体にである。しかしこの最初の立場は維持しうるものではない。彼の身体は、他のすべての物体よりもより多くの実在もより少ない実在も持たないし、持ちえない。従ってより先に進んで、その依拠している原則の適用を最後まで続ける必要があり、そして更に宇宙を生きた身体の表面に狭めた後に、この身体そのものを、人が広がりはないと最後に前提するであろうある中心に、収縮する必要がある。その際には、人はこの中心から、いわば延長へと膨張し増大するところの、そして最後には、第一に広げられた我々の身体を与え、次に他の物的な客体のすべてを与えて終わるところの、非延長的な諸感覚を出発させるだろう。

(208) Bergson, *Matière* (前掲注161参照) p.199 et suiv. 以下では、主として苦痛の感情を例として、論証が進められる。

もし私が消滅するとすれば消滅するであろう感情的な諸状態が、強度の減少の効果のみによって、延長を取得し、空間においてある特定の場所を占め、それ自体とそして他の人達の経験と、常に一致するある安定した経験を構成するに至るといふこと、それが我々に理解させるについて困難となるだろうものである。それゆえ人は、何をなそうともまず最初に、いずれかの形式の下で諸感覚に、延長を与え、次になしで済ませたいと望んでいたところの独立性（私の人格に結ばれていた感情が、安定した経験を構成する知覚・表象となるために得ていなければならない独立性）を与えることへと導かれてしまうであろう。しかし他方で、経験を構成する知覚・表象と私の人格に結ばれた感情とに、このような仕方でのつながりを承認するこの仮説において、感情は知覚・表象より明確であることはほとんどないであろう。なぜなら、もし人が強度を減らすことで、諸感情がいかにして諸知覚・表象となるのかを理解しないとすれば、一層のこゝま経験を構成するに至っている知覚・表象が、ある強度の増加（失った強度の回復）により私の人格に属する感情に戻りえてよいはずであるが、それはいかにしてなのかを人は理解しない。しかしそこにはなお、主要な困難があるというのではない。むしろそれは、この仮説が以下の問いに、明確な解答を与えないという点にある。この仮説によれば、身体が感じている刺激の漸次的な増大（回復）が、知覚を苦痛に変更（回帰）させて終わること、それは肯定せざるをえないだろうが、同時に少なからず肯定すべきなのは、その経験（現象）を構成するに至っていた知覚から、私の人格に属する苦痛への変更（回帰）は、私に外的となっている様態（イメージ）が、私の身体に属する感情に变ずる以上、ある正確な瞬間で画されるはずだということである。なにゆえに、ある別な瞬間であるよりは、むしろこの瞬間なのか？要するにこの仮説は、その経験（現象）における感情の強度の減少が、あるそのごとき特定の瞬間に、延長と知覚・表象としての明らかな独立へのある正当性を与えるのか、いかにして強度のある増加が、

ある他にではなくむしろある瞬間に、知覚・表象を、人が苦痛と呼ぶ積極的な作用の源に回帰させるのかについて、理解させないのである⁽²¹⁰⁾。

(b) 感覚・感情における身体の現実的作用

そこで次には、この仮説が特に理解させえなかった、感情がある特定の瞬間に、様態（イマージュ）からいかに浮かび出るはずであるか、そして人が広さを占めるある知覚から、人が非延長的であると信ずるある感情に、いかにして移るのかについて、全く新しい光の下で、それに代わる真実の解明をもたらそうとするのであるが、しかしそのためには、苦痛の現実的な意義（後掲注211参照）に関して、以下のいくつかの予備的な注意が不可欠であるとする。

ある外的な物体が、アメーバの突起部の一つに触れるときには、この突起部は収縮する。それゆえ原形質の集合の一部は、等しく刺激を受けそれに対して反応しうる。ここでは知覚と運動は、区別されず収縮性である単一な特性に融合している。しかし有機体が複雑となるにつれて、仕事は区別され、機能は分化される。そして我々のもののような有機体において、いわゆる感覚的な線維は、もっぱら衝撃がそこから動的な諸要素に伝播するところの中枢領域に、刺激を伝達する機能を担う。それゆえそれらの線維は、前線での見張りの資格で身体全部の進展に協力するために、独自の作用の機能は放棄したように思われる。しかしそれら感覚的な線維は、その有機体をその全体において脅かす、破壊の同じ諸原因に、個別的に曝されたままである。そしてこの有機体はその危険を逃れるために、あるいはその損傷を修復するために、動く能力をもつものに対し、感覚的な要素は分業がそれをそこに余儀なくするところの、不動性（自力で動く能力の放棄）を維持する。そのようにして、物事を原状に戻すための、損傷した

(210) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.202 et suiv.

要素の努力—知覚神経上の一種の動的な傾向—以外の何ものでもない苦痛が生ずる。あらゆる苦痛はそれゆえ、ある努力から、そして無力な努力から成るはずである。あらゆる苦痛は、局部の努力であり、そしてその無力（効果の虚しさ）の原因は、その努力の孤立性そのものである。なぜなら有機体には、その諸部分の相互牽連性のゆえに、もはや総体上の諸効果以外には、虚しくない効果が生ずることの適性がないからである。また苦痛が生きている存在によって負われている危険に、絶対的に不均衡なのは、その努力が局部的だからなのである。そこで例えば危険は致死的でありうるが、苦痛は軽くありうるし、苦痛は耐えがたいものでありうる（歯の病のそれのように）が、危険はとるに足らないものでありうる。それゆえに、苦痛が介在する正確な瞬間が存在するし、存在するはずである。それは、有機体の関係する部分が、刺激を受け入れようとするときではなく、それを排斥しようとするときである⁽²¹¹⁾。そして知覚を感情から分けるのは、次に見るように程度の差だけではなく、性質の差でもある。

我々は生きた身体を、周りの客体に対して、これらの客体がそれに行使する作用がそこから反射される（そして潜在化される）、一種の中心として考えた。意識的知覚における外的な知覚はこの反射から成る。しかしこの中心は、数学的な点ではない。それは自然のすべての物体と同様に、それを害するように脅かす、外的な諸原因の作用に晒されているある物体である。我々は、それ（身体）がこれらの原因の影響に抵抗するのを、見た

(211) 感情を、それは我々の内の何が主体的に感じているのかというのとは別に、我々の身体においてそれを生じさせている本体は何であるか、それはいかに知覚しうるかを問えば、本文にある通り損傷した感覚要素（局部）が、それを修復しようとしている努力から生じていると知覚され認識されるはずである。そこで我々は、例えば痛みという感情を生じさせている延長で現れる個所を、指し示しうるし、延いては感情が非延長的であるともいえない次第となる（後掲 [D]・(b) 参照）。

ばかりである。それは外部からの作用を反射することに限定されない。それは闘い、そしてそのようにしてこの作用のあるものを吸収する。そこにその感情の源がある。人は隠喩によって、もし知覚が身体の反射力を測定するとすれば、感情はそれの吸収力を測定するといいうるのであろう⁽²¹²⁾。

しかしそれは、ある隠喩に過ぎない。我々は子細に物事を見ることにより、知覚は感情の強度の減少から生ずるとの仮説に代えて、感情の必然性は知覚そのものの存在に由来することを、即ち知覚が先に存在するから、感情が存在するのであって、その逆ではないことを十分に理解する必要がある。我々がそれを了解しているように理解された知覚は、諸事物に対する我々の可能的な行為を測り、そしてそのことによって反対に、我々に対する事物の可能的な作用を測る。身体の行動する力がより大きければ（神経組織のより優れたある複雑性によって象徴される）それだけ、知覚が含む範囲もより広大である。ところで、我々は客体が、空間において我々の身体から遠く離れていると知覚するときには、その知覚は客体の潜在的な作用（身体の行為に対する問題提起の作用—前掲注204参照）以外のものは表さない。しかし、空間での知覚において、この客体と我々の身体との間の距離が減少すればするほど、換言すれば空間的に危険が緊急となるか、あるいは約束が即時となればなるほど、客体の知覚の身体に対する潜在的な作用は、現実の作用に変更してゆく（現実の作用を及ぼすようになってゆく）傾向がある。それゆえ、我々の身体を、客体から分ける距離の空間における知覚は、真にある危険の多かれ少なかれ大きな介入を測定し、ある約束の多かれ少なかれ近い満期を測定しているといえる。そこで自らを顧みて、我々の客体に対する感情は、空間における知覚が教えるこの測定に応じて（左右されて）、生じてはいないだろうか？そして身体と客体の距離がなくなり一致したときには、その客体の知覚は頂点に達した現実的

(212) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.203 et suiv.

な作用を表すものとなり、感情は空間における知覚が身体に徐々に及ぼすようになる作用のゆえに生じているとの真実（先の第一の仮説とは逆の真実）が、現実化するであろう。

以上の事柄を身体の側からみれば、我々の諸感覚（感情）⁽²¹³⁾が知覚に対応している関係は、我々の身体に生ずる現実の作用（苦痛などの作用）が、身体への可能的なあるいは潜在的な作用（身体の変態に対する問題提起の作用）に対してあるところのものである。身体への潜在的な作用（身体の変態に対する問題提起の作用）は、他の諸物体に関係し、そしてこれらの客体において知覚として現れる。その現実的な作用は身体そのものに関係し、そこにおいて現れる。それゆえ結局のところ、あたかも現実的なあるいは潜在的な作用の、それらの適用あるいは起源の点への真の帰還（知覚の潜在的な作用は客体への、知覚の現実的作用は身体への帰還）を通じて、所与のものとしての外的な諸様態（イマージュ）は、我々の身体によってそれを取り巻く空間に反射され（前掲（7）・[A]・(a)参照）、そして身体の変態は身体によってその物体（身体）の内部で決せられるように、従って双方は牽連しているが別な性質であるように、すべてが経過するであろう。

「そのことが常に、私の知覚は私の身体の外部にあり、そして私の感情は反対に私の身体の内にあるという事実に戻る。外的な客体はそれらがあるところで、それらにおいて、私においてではなく知覚されるのと同様に、そのようにして私の感情的な状態は、それらが生じるところで、即ち私の身体の変態されるある点において感じられる。物的世界に適用される諸様態（イマージュ）のこのシステムを考えなさい。私の身体はそれら様態（イマージュ）の一つである。この様態（イマージュ）の周りに、表象

(213) ベルクソンは、おそらく感覚 (sensation) と感情 (affection) が、身体に生じているところの、客体との関係での現実的作用である点で共通しているとの認識から、これらの用語をここでは峻別して使用していない。

が、即ち他のものに対する起こりうるその影響が、配される。その身体の様態（イマージュ）において感情が、すなわち身体そのものの上での現実的な努力が生ずる。我々の各々が自然に自発的に、ある様態（イマージュ）とある感覚の間に確立する差異は、基本において確かにそのようなものである。我々が様態（イマージュ）は我々の外に存在するというとき、我々はそれによってそれは我々の身体に外的であることを理解する。我々が内的なある状態としての感覚をいうときには、我々はそれが我々において出現することをいおうとする。そしてそれが我々の身体が消滅するとしても、知覚された諸様態（イマージュ）の全体が（諸客体として—筆者）存続するのに対し、我々是我々の諸感覚を消滅させることなしには、我々の身体を排除しえないと（我々の身体を排除すれば、我々の諸感覚は消滅すると—筆者）、主張する理由である」⁽²¹⁴⁾。

[D] 従来の理論の根本的変革の必要性

(a) 知覚の素材ではなく不純要素としての感情

こうして、知覚と感情の間に存する、明らかな性質上の差異が論証されたのであるが、著者はそこから、これまでの理論に対して、この点に関する根本的な考え方の変革を迫っている。最初に、我々の行為との関係でまずなされるべき純粹知覚の理論について、前記のように我々の身体は空間における数学的な点ではなく物体であることにより、その客体に対する潜在的な作用は（ベルクソンの、知覚は科学が目指す純粹認識のためではなく、我々の自由な行為との関係でなされるとの理論からは、身体の客体一般に対する潜在的な作用が、まず客体の純粹知覚に向かわせる）、身体に生ずる現実的作用で複雑化され浸透されていること（感情のない知覚は存在しないこと）を考慮する必要があるとする。そして感情は、外的な物体

(214) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.205 et suiv.

の様態（イマージュ）に混ざっているところの、我々に内的なものなのであるから、それは様態（イマージュ）に純粋さを見出すために、まず知覚から抜き取る必要のあるものであるが、心理学者にはその点が理解されていないという。「しかし知覚と感覚の性質上の差異、機能上の差異—後者は現実的なある作用を含み、前者は単に可能的な作用を含む—に目をつぶる心理学者は、もはやそれらの間に程度の差以外のものを見出しえない。感覚（それが含む混乱した努力のゆえに）は、曖昧にだけ位置付けられるのを利用して、彼はそれをすぐに非延長的と宣し（前掲注211参照—筆者）、そしてそのときから感覚一般を、我々が構成の手段によってそれでもって外的な諸様態（イマージュ）を得るところの、単純な要素とする。真実は、感情は知覚がそれによって作られる第一の素材ではない。；それはむしろそこに加わった不純性である」⁽²¹⁵⁾。

（b）感覚・感情が有する延長性について

従来の理論に根本的変革を迫る第二の点は、その理論の最初において、心理学者が代わる代わる感覚を非延長的と考え、そして知覚を諸感覚の集合体と考えるように導いている、いまの錯誤についてである。著者は例えば痛みが感情が、前記の通り神経的要素（局部）の損傷修復の努力という本体から生じているがゆえに、延長的なものとして認識しうるし、このような思考様式を無視しては、感情の实在性・現実性を対象化して確認しえないのに、そのことに思い至らない錯誤を非難する。

「我々の内的な諸感情は、我々の外的な諸知覚と同様に、異なった種類に分けられる。これらの種類は、知覚のそれらと同様に、非連続的で教育が埋める諸間隔によって分けられている。そこからは何ら、感情の各種類について、ある種類のある直接的局所化が存在しないという帰結、それに

(215) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.206 et suiv.

固有なある（身体上での一筆者）場所色（couleur locale）が存在しないという帰結とはならない。より先に進もう。：もし感情がこの場所色をすぐにもたないとすれば、それは決してそれをもたないであろう。なぜなら、教育がなしうることのすべては、ある特定された感情が、同様に特定された視覚的なあるいは触覚的な知覚の様態（イマージュ）（前述のように客体に帰されない、感情の本拠である身体の局部に帰されるような一筆者）を呼び起こすようにするために、現存する感情的な感覚に、視覚や触覚上の可能的なある知覚上の理念（感情の各種類が有しているはずの我々の身体上の知覚における場所色のような理念一筆者）を結び付けることであるだろうからである。それゆえに、この感情そのものにおいて、それを同じ種類の他のものから区別するあるもの、そして他のすべてよりはむしろ視覚上あるいは触覚上の可能的なこの所与に、それを結び付けるのを可能とするあるもの（身体上での場所色のような一筆者）が必要である。しかしその事情は、感情が初めからある延長的な確定を保持しているということではないのか？我々には作用・行為のために、我々の感情的な経験を、視覚、触覚、筋肉感覚の可能的な所与に翻訳することが不可欠である⁽²¹⁶⁾。一度この翻訳が確立されると、原本は色あせるが、しかしその翻訳はもし原本が最初に提示されていなかったとすれば、そして感情的な感覚が最初からその力のみにより、そしてその仕方（身体上で場所的に一筆者）位置付けられていなかったとすれば、決してなされえなかったであろう」。

(216) Bergson, *Matière* (前掲注161参照) p.207 et suiv. 我々がある客体に対して可能的な行為を実現するためには、精神が感覚・感情に働きかけて、主体的に生成させようとしている想念としての経験を、身体の現実的作用へと変換させなければならぬのであるが、それが客体からの作用に対する反作用であることから、まず客体から受けた感情・感覚の原本に基づいて、その身体に対する作用がどこでどのように行われたのかという所与が、翻訳によって判別されなければならない（詳細は後述）。

しかし心理学者は、この常識上の考えを受け入れるのに、非常に大きな苦勞をなす。彼に思われるところでは、神経要素に感情（感覚）がありうるのには、それが感じる主体的組織である必要があり、そして神経要素は伝達器官であって感情（感覚）を感じる主体ではないから、我々の内の何かあるそのような主体が感じている、非延長的な感情（感覚）だけが存する。そこで、その感情を点で受けているものとして、その感情が神経よりはもっとよく依存しているように思われる脳に近づけ、そして論理的に脳にそれを置くに至るであろう。更に諸感覚を脳中枢の方へと収束させた後に、その中枢によって感じられているが、それから分離される非延長的な感情（感覚）とするために、同時に脳の外にそして空間の外に押しやる必要があるだろう。そうしてその時に、絶対的に非延長的な諸感覚を表象するだろうし、また他方ではそこに投影されるに至るであろうところの、諸感覚と無関係なある空虚な空間を表象するであろう。続いて彼は、それらの非延長的な諸感覚がいかにして広がりを獲得し、そしてそこに位置付けられるために、他のすべてに優先する空間のそのような点を選ぶのかについて我々に理解させるために、あらゆる種類の努力で疲れ切るであろう。しかしこの理論は、広がりがないものがいかに広がるのかを、我々に明確に示しえないだけではない。それは同様に感情、延長、表象を説明しえなくする。その理論は感情的な諸状態について、それを生じさせる神経要素の損傷の修復の努力という、延長的な本体の知覚なしに考えるのであるから（前掲注211参照）、なにゆえにそれらが意識において、これこれの瞬間に現れあるいは消滅するのかを理解しないところの、同数の絶対的なものとして、自らに与えるはずであろう。感情から表象への移行は、同様に見通しえないある神秘に覆われたままであるだろう。なぜなら、人は内的で単純で、非延長的な諸状態に、それらが空間におけるこれこれの特定された秩序を優先して採用するためのある理由を、決して見出さないだろうからである。そして最後に、その移行する表象それ自体は独立性ある絶対的

なものとして、提示されるはずであろう。人はその起源も、その用途も理解しない⁽²¹⁷⁾。

(c) 行為の源であり感情の本拠としての身体

しかし、我々の行為との関係でまずなされるべき純粹知覚（宇宙の純粹認識自体のための純粹知覚ではなく）について、自説の方向で考えれば、すべてが明瞭化する。「反対に人が表象そのものから、即ち受容される様態（イマージュ）の総体から出発するとすれば、物事は明確化する。私の純粹状態での、そして私の記憶から分離された知覚は、私の身体から他の諸物体へと進むのではない。それは最初に諸物体の総体の内にあり、次に少しずつ自らを限定し、中心として私の身体を採用する。そして知覚は、この身体が保有するところの、諸行為を行う、そして諸感情を感じる二重の能力の経験によって、一言でいえばすべての様態（イマージュ）の中から特権を受けた、ある様態（イマージュ）の感覚運動性上の力（pouvoir sensori-moteur）の経験によって、正当にそのような身体の位置付けへと導かれる。実際に一方でこの身体の様態（イマージュ）は、常に表象の中心を、他のすべての様態（イマージュ）がその周りに、それらがその作用を蒙りうる序列そのものにおいて並べられる仕方でも占める。；他方で私は、他の諸様態（イマージュ）と同様に単にそれ（身体）の表面的な皮相を認識する代わりに、私が感情的と呼ぶ諸感覚によって身体の内部を、内側を知覚する（前掲（1）・[B] 参照—筆者）。それゆえ諸様態（イマージュ）の総体の内に、優遇される、その深層において知覚され、そしてもはや単に表面でではなく、行為の源であると同時に感情の本拠である、ある様態（イマージュ）が存在する。私が私の宇宙の中心として採用するのは、私の人格の物理学的な基礎として採用するのは、この特別な様

(217) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.208 et suiv.

態（イメージ）である」⁽²¹⁸⁾。

(d) 著者の知覚理論と心理学の理論の対比

以上で、知覚は非延長的な諸感覚の空間への投影であるとする心理学の理論と、知覚は我々を取り巻く諸客体からの導きにより、意識において生ずるものであるとする自説との、対比的考察が完了されるのであるが、著者はなお自説とは異なり心理学の理論は、物質についても、我々自身の性質についても、教えるところがない事情を要約的に付け加えている。既述のように、心理学の理論では非延長的な感覚（感情）が、広がりと一緒になるプロセスを説明できないであろうが、それができるとしても、次には異なった感覚の空間での諸々の広がり、いかにして一緒になるのかという難問が生ずる。例えば、視覚的な広がりや触覚的な広がりについて、質的に異なるこれら感覚が協力して一致するといえるものではなく、両者の感覚の秩序の並行性を与えるもの、それゆえ両者に共通に作用するそれらから独立なある秩序として、物的世界の仮説に至らざるを得ないだろう。だがそのように仮説を増やしたからといって、一方でその物的世界（物質）は感情から生じた知覚を単に整序するために所与のものである以上は、我々の脳中枢に発する感覚とは別個のものでなければならず、しかし他方ではそれは、諸感覚の一致を生じさせているものと仮定されているに過ぎないから、諸感覚の投影である知覚が、この物的世界（物質）については、何も教えることができず、それを神秘的な実体のままとするだけであろう。

しかしこの理論によると更に、「我々自身の性質、我々の人格の役割と用途は、ある同様に大きな神秘に包まれているままである。なぜならこれらの基本的で、非延長的で、空間において発展するだろう諸感覚は、どこからきて、いかにして生じ、何に役立つはずなのだろうか？我々はそれら

(218) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.209.

を、人がその起源も目的も分からない、同じ数の絶対的なものとして、提示する必要がある。そして我々の各々において、精神と身体を区別する必要があると仮定しても、我々は身体についても、精神についても、それらがそれらの間で維持する関係についても、何も知りえない。いまや、我々のこの仮説（物的世界と諸感覚の一致という心理学の仮説—筆者）は何かから成るのか、そしていかなる正確な点で、他のものと区別されるのか？人がそれについては何も言えず、その理由はそれが他のすべてのものであるよりは、むしろそれがそうであるものための理由が存在しないからである」。

しかし、感情から出発する代わりに、我々の行為から、即ち我々がつ事物における変化を自由に実現させる能力から出発する自説によれば、我々が行為との関係でまずなす純粹知覚と感情の関係は、こう整理される：諸行為がこれらの中心的能力から放射するためには、他の様態（イメージ）の諸運動あるいは諸影響が集められ、利用される必要がある。それゆえ行為するために作られている組織は、神経諸要素の連鎖を有し、それらの連鎖は二つの極点—その一つが外的な諸印象を集め、そしてそれの他方は運動を行う—の間に張られている。そして神経組織においては、どこにも意識的な諸中心は存在しない（次第に明らかにされてきているように、その中心は精神とその導きの下にある意識である）。しかし知覚は、その神経諸要素の連鎖を生じさせた前記の同じ原因（我々の有する事物における変化を自由に実現させる能力）から、それを支えている器官と共に、そして「生」一般と共に生ずる。それは生きている存在の行動する力を、受け入れられた衝撃に続く運動や行為の不確定性（その衝撃から自動的に運動や行為がなされるのではない、なお不確定な・自由な確定可能性ある行為をなしうる範囲）を表し、測定する。この不確定性は運動や行為そのものに関する省察によって、あるいはよりよく我々の身体を取り巻く諸様態（イメージ）の空間と時間における区分によって表される。そして運

動を受け定め伝達する神経要素の連鎖は、正に本拠でありこの不確定性の測定を与えるのであるから、我々の精神に導かれた意識がなす知覚（純粹知覚）は、これらの神経諸要素のすべての詳細に従い、すべてのなしうる変更を表現するように思われるであろう（我々はこの表現に従って、行為のための意識的知覚を形成しようとするであろう）。従って、純粹状態における我々の知覚（純粹知覚）は、真に事物の一部を成さなければならない（事物の一部と同じ精彩とならなければならない）であろう（さもなければ、事物に対する自由な行為のためにまずなされるべき、純粹知覚の役割を果たしえない）。そして固有に言われる感覚の方は、空間において弱体化して、知覚として広がるために意識の深部から自発的にほとぼしるところではなく、それ（身体）に影響するところの諸様態（イマージュ）の中心で、我々の各々が彼の身体と呼ぶ、この特別な様態（イマージュ）が受ける、必然的な諸変更と一致するのである⁽²¹⁹⁾。

（9）知覚と記憶の関係について

〔A〕知覚と記憶を結ぶ意識の役割

我々が有する知覚は、非延長的な諸感覚を、空間に投影したものであるとする心理学の理論に対して、著者が提示する理論によれば、それはあくまでも我々の意識が諸客体として実在する諸様態（イマージュ）を模範として得た純粹知覚なのであり、そして意識は知覚の最終目的である我々の行為の適切な行使のために、宇宙の諸客体（諸様態）間の関係についての純粹知覚を、我々の行為する身体と諸客体（諸様態）の関係に表象化して、意識的知覚をなすということであった。著者はこの点の自説を、我々の知覚はあくまでも純粹知覚としてある（さもなければ、我々は物的世界に自由な行為を入り込ませえなくなる）との趣旨を示すために、自から「純粹

(219) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.210 et suiv.

知覚の理論」と呼びながら、この段階での意識の役割は、常に新たに生ずる現在においてなす知覚において、我々よりもむしろ事物の一部をなすであろう、瞬間的な見たもの（非個人的知覚）の絶え間ない連続を、記憶の連続的な糸により、結ぶことに限定されるという。「我々の意識は殊に外的な知覚においてこの役割をもつということ、それは他方で生きている身体の定義そのものから、人がア・プリオリに演繹しうることである。なぜなら、もしこれらの身体が、諸々の刺激を、不確定な予見できない反応（行為）—自発的に選択された反応（行為）・筆者—に高めるために、受けようとしているのであれば、反応（行為）の選択も偶然で行われるはずがないからである。この選択（のための判断—筆者）はいかなる疑いもなく、過去の諸経験に影響され、そして反応は類似の状況がそれらの背後に残しえた、記憶への訴えかけなしにはなされない。なされるべき諸行為の不確定性（自由性—筆者）はそれゆえ、純粋な気まぐれと混同されないために、（非個人的に—筆者）知覚された諸様態（イメージ）の保存を要求する。人はこういいうるだろう、我々は過去に関する等しくそして対応するある見通しなしには、未来に作用しないと（記憶に保存された純粋知覚に基づく見通しなしには、意識的知覚によって未来に作用しないと—筆者）、我々の活動の前への押し進めは、その背後に諸記憶がそこに身を躍らせるある空虚を作ると、そして記憶はそうにして認識の領域では、我々の意思の不確定（自由—筆者）の反映である」と。

著者はこうして、既に独自の二元論哲学を構築するための第一の支柱である、物質の独立した実在性の理論を揺るぎなくしたいま、本著作の冒頭で二元論にとって最重要であると位置づけていた記憶の問題へと、次に軸足を移そうとするのであるが、その説示の重要性を、ここに予告する。「しかし記憶の作用は、今の皮相な考察がそう占わせるであろう以上に、ずっとより先へと、ずっとより深く及ぶ。記憶を知覚に復帰させて、そのことにより我々の諸結論がもちうる誇張されたものを、いまや訂正し（後掲

[C] 参照), 意識と諸事物との間の, 身体と精神の間の接触点を, より多くの正確性をもって確定する時は到来した」⁽²²⁰⁾。

[B] 現実の直観の基礎 (知覚) と以前の直観の基礎 (記憶)

最初に, 現在の知覚と存続する過去の諸様態 (イマージュ) である記憶との関係が, おおよそ次のように説かれる: もし人が記憶を, すなわち過去の諸様態 (イマージュ) の存続を仮定するならば, これらの様態 (イマージュ) は恒常的に我々の現在の知覚と混じり合い, そしてそれにとって代わることもできるだろうといおう。なぜならそれらは, 現在の不確定な行為を自発的に確定させるのに有用であるためにだけ, 自らを保存するのだからである。あらゆる瞬間に, それらは獲得されている経験で, 現在の経験を豊かにすることにより, 現在の経験を補完する。そして現在の経験は大きくなりながら絶えず進み, ついには獲得されている経験を覆い水没させる (もはや意思が支配しえない, しかし蘇生しうる経験として, 無意識に属する記憶へと水没させる—後掲Ⅳ参照)。現実的でいわば瞬時的な—外的世界の我々の知覚が質的に融合してゆく—直観⁽²²¹⁾の基礎は, 我々の記憶がそれに付け加えるもののすべてと比較すると, 微々たるもの

(220) Bergson, *Matière* (前掲注161参照) p.212 et suiv.

(221) 我々は, 新たに生ずる現在の知覚の, 絶え間ない連続 (純粹持続) によって, 自己の存在を実感し把握するし, 諸々の客体の存在 (例えば物質の運動の動性—前掲Ⅳ・(2)・[B]・(d) 参照) についても, それの内から理解する。これがベルクソンのいう「直観」(intuition) による認識である。それに対置されるのが時間の各時点での, 自己の状態を分離して自己の認識としたり, 空間での地点と地点間の距離に分けて運動を, 外から辿られる道筋等のある観点に従って把握したりする, 「分析」(analyse) による認識である (cf. Bergson, introduction (前掲注5参照) p.1392 et suiv. *La pensée et le mouvant*, introduction (deuxième partie), 1922, œuvres Bergson édition du centenaire, 4éd., 1984, (以下では introduction (deuxième partie) と略記する) p.1270 et suiv. 本文の直観の用語も, 外的世界の諸知覚がそれを通じて質的に融合する, 純粹持続上の意識による把握あるいはその仕方という意味で, 使用されていると思われる。

である。正に類似する以前の諸直観（純粹持続で把握され、個人的なものを含まない既に過ぎ去った知覚）の記憶が、その直観（現在の純粹持続において把握され、個人的なものを含まない知覚）そのものより有用であるがゆえに、更には我々の記憶において引き続けている諸事象の全体に結ばれており、そしてそのことにより我々の不確定な（自発的選択可能な）行為の決定を最もよく照らしうるがゆえに、それはかかる決定において、現実の直観に取って代わる。その際に現実の直観が果たす役割は、記憶に訴えること、それにある身体を与えること、それを能動的にしそしてそれにより現実的とする以外では、もはやなくなる—後に証明されるであろうように（後掲Ⅳ参照）—のである。そのようにして、最も有用な決定のために不可欠な、知覚の知覚された客体との一致は、事実において（*en fait*）よりはむしろ法において（*en droit*）—我々が自発的に選択可能な（自由な）行為を、客体との関係でなしうるためにはそうでなければならないように—存在するという理由を有している。その際に、知覚はこの法における要求にかなうために、ついに思い出すためのある機会以外のものではなくなくなっていること、我々はそのようにして実践的には客体の実在性の程度を、それが我々に対してもつ有用性の程度で測るということ、我々は最後に基本において客体としての様態（イマージュ）の実在性そのものと一致する、これらの直接的な我々の諸直観を、実在的なものの単なる徴表（意識的知覚としての表象—筆者）に格付けして、我々の行為との実践的關係（行為する主体である我々の身体を中心とする関係）に移して考えるあらゆる利益をもつということ、それらを考慮する必要がある。

しかし我々はここで、知覚に我々自身の基礎から引き出され、次に空間において展開される非延長的な外的な投影を見る人達の、誤りを発見するだろう。彼らは我々の完全な知覚が、我々に個人的に属する諸様態（イマージュ）を、そして外部化される様態（イマージュ）を含むことについて示すのには苦勞していない。彼らが示すのを忘れてるのはただ、知覚が

知覚された客体と一致するところの、非個人的な基礎（純粹知覚としての基礎—筆者）が残らなければならないという点であり、そしてこの基礎が知覚に、単なる個人的で内的な表象というのではなく、外部化する資格そのものを与えなければならないという点なのである⁽²²²⁾。

〔C〕「純粹知覚」と「純粹記憶」の性質上の相違

著者はこれから、これまでの純粹知覚（客体を模範とする非個人的な知覚）の考察によっては、十分な解明に至りえなかった、我々の「生」における身体と精神の役割、より広くは物質と精神の関係について、純粹記憶（精神が想念・*idée*としてもつ記憶—詳細は後述）の考察によって解明する道へと進むのであるが、その進行の妨げとなっている主要な誤りをまず指摘する。それは、知覚も記憶も、外的客体からの刺激との関係などを問題とすることなく、我々に内的な状態であるとし、そして記憶は知覚のより弱い状態（逆に知覚は記憶のより強い状態）として、それらに性質上の差異ではなく、程度の差異だけをみる誤りである。そのことにより、知覚の方は、客体からの刺激も、それに対する不確定な（自発的選択可能な）行為も、またそのための諸現象としての脳と神経組織による無意識的メカニズムも、それらが現実性を有している現在に属しているのに対し、記憶はそれらの現実性がもはやなくなっている過去に位置付けられるという、本質的な区別は無視されるに至る⁽²²³⁾。

〔D〕「純粹記憶」の考察が精神について切り開く展望

(a) 精神の存否に関する唯物論と唯心論の誤った見解

しかしこの「純粹知覚」からの「純粹記憶」の区別は、人が精神と呼ぶものに関するある展望を、その区別された「純粹記憶」が我々に開くこと

(222) Bergson, *Matière* (前掲注161参照) p.213 et suiv.

(223) Bergson, *Matière* (前掲注161参照) p.214 et suiv.

で、精神の存否に関して唯物論と唯心論とをどちらかに決めるはずである。著者が引き続く二つの章（後掲Ⅳ・Ⅴ）で最初に従事するのは、問題のこの側面である。なぜならその問題についてのある仮説が、いわばある実験的な検証をもたらすのは、この側面を通じてだからである⁽²²⁴⁾。以下では、本書での最重要なその点の叙述を、できるだけ本文に忠実に掲げたい。

人は実際に、これまでの純粹知覚に関する我々の諸結論を、次のようにまとめうるであろう。物質には、現実^に知覚^において与えられているものに加えて、あるものが—しかし異なるあるものではない—が存在する。おそらく意識的知覚（前掲注186参照）は、物質の全体には到達しない。なぜならそれは、意識的なものとして、この物質における我々の様々な必要に関係するものの選別、あるいは識別から成るからである。しかし物質の知覚と物質そのものとの間には、程度の差だけが存在し、性質のではなく、物質を模範とする純粹知覚は物質に対して、部分の全体に対する関係にある。それは物質が、我々がそこに知覚する諸力とは異なる種類のそれらを行行使えないということである。物質は神秘的な力をもたないし、包蔵しえない。十分に明確なある例、他方で我々に最も関係するもののある例にすると、我々の神経組織、つまり色、抵抗、凝集力等々を提示する物質的集合は、おそらく知覚されない物理学的な諸特性をもつが、しかし物質的集合である以上は、物理学的な特性のみで、神秘的特性は有しえない。そしてそのときから、神経組織は運動を受け、抑制し、伝達する以外の役割をもちえない。

ところで、あらゆる唯物論の本質は、反対のことを主張する点にある。なぜならそれは、物質的な諸要素の働きのみから、意識およびそのすべての機能が、生じると主張するからである。そのことによってそれは、既に知覚された物質の諸性質そのものを、感じるゆえにまた感じられた諸

(224) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.218.

性質を、知覚行為における脳諸現象（物質）の痕跡に従う同数の諸燐光として考えること（客体である物質がもつ性質を、そうではなく意識の機能を纏う脳の諸現象が、物質から切り離してもたせた諸燐光・付帯現象として考えること）へと導かれる。

ある奇妙な無分別によって、唯心論も常にこの道において、唯物論に従ってきた。唯物論が、意識の機能を纏う脳諸現象がもたせる諸燐光（付帯現象）とするために、物質から取り除いた感じられ見られる諸性質のすべてで、精神を富ませると信じて、唯心論は物質からそれが我々の知覚において纏う諸性質を、同数の主観的な外観であるだろう諸性質として、精神の諸表象とするために、剥ぎ取ることを躊躇わなかった。それはそのようにして、余りに頻繁に物質をある神秘的な実体と、我々がもはやその虚しい外見（広がりだけをもつという外見）以外に認識しないという正にその理由で、他のものと同様に思想上の諸現象を生じさせようであろうところの、神秘的な実体としてきた。

真実は、唯物論に反駁するある手段が、唯一のある手段が、存在するだろうということである。その手段とは、物質（ここでは脳という物質）はそれがあるであろうようなものとして、絶対的に存することを確立するようなそれであるだろう。その手段によって人は、脳という物質から唯物論が考えたすべての潜在能力、すべての隠れた力を排除するであろうし、また精神の諸現象は独立のある実在性をもつであろう。しかしそのためには、物質に唯物論者と唯心論者がそれから切り離すことで一致している—後者はそれを精神の諸表象とするために、前者は物質に広がりという偶然的な外装 (revêtement) だけを見るために—諸性質を物質に残し、意識（精神）がそれらを受容すると認めることが必要であろう。

正に物質に対する常識の姿勢は、そのようなものであり、そしてそれこそ常識が精神を信ずる理由である。我々には、哲学はここで、常識のこの姿勢を、しかし次の点に関して修正しながら、採用すべきであるように思

われた：実践的には知覚と区別されえない記憶が、実際には過去を現在に挿入し、また知覚が有する単一の直観に、持続の多くの瞬間を収縮させている原因なのであり、そしてそのようにしてそれのかかる二重の作用により、法の上では物質を物質において知覚しているのに、事実上は物質を我々が我々において知覚する（その物質が、我々に対してもっている主観的意義を過去との関係で付加しながら、それを知覚する）ことをさせている原因なのだということである（次項参照）。

(b) 物質から絶対的に独立している力としての純粹記憶

そこから、記憶の問題の主要な重要性が生ずる。もし記憶が、殊に知覚にそれが我々に対してもつ主観的な性質（意義）を伝えるものであるのなら、客観的な物質の哲学が最初に目指すべきは、記憶のそのもたらすものを、知覚から排除することである（前掲（6）・[B]・(b)参照）。我々はいまやこう付け加えるだろう。純粹知覚は、現存する物質の全体あるいは少なくとも本質的なものを、直接的・瞬時的に与えるのであるから、残余のものは記憶から生じているはずであり、現存する物質にさらに付け加わるはずである。ゆえに記憶は（現存する物質にさらに付け加わるものであるがゆえに）原則において、現存する物質から絶対的に独立な力である必要がある。それゆえもし精神（物質とは独立な力）が、ある実在であるのなら、我々が実験的にそれに触れるはずなのは、ここで、記憶の現象においてである。そしてそのときから、純粹記憶を物質である脳のある作用から、派生させるためのあらゆる試みは、その分析においてある基本的な幻想を暴露するはずであろう。

同じことを、あるより明確な形式の下でいおう。我々は、物質はいかなる隠れた力も、認識できない力ももたず、それはそれが持つ本質的なものにおいて、純粹知覚と一致すると主張する。そこから我々は、生きている物体、特に神経組織は、刺激の形式の下で受容される諸運動、および反射

作用あるいは意図的作用の形式の下で伝達される諸運動のための、通過の諸々の場所に過ぎないと結論する。それは、人が諸表象を生じさせる特性を脳物体に付与するのは、虚しい考えだろうということである。ところで我々がそこで、精神をその最も明白な形式の下で把握するところの記憶の諸現象は、正にある表面的な心理学が、最も進んで全く脳の活動のみから生じさせ、その理由も正にそれら記憶の現象が、意識と物質の間の接点にあることに求めるものであり、それらの現象はまた、唯物論者の反対者さえも、脳を諸記憶の容器と取り扱うのに、いかなる不都合もみないものなのである。

しかしもし人が積極的に、脳のプロセスは記憶のある非常に弱い部分にだけ対応していること、それは記憶の原因であるよりは一層に結果であること（記憶によって導かれる行為・作用に結果として関係していること）、物質（脳）はここでは他のところでと同様に、ある作用の車であって、ある認識の基体ではないことを証明しようとすれば、その際には我々が主張している命題（精神の实在の命題）は、人がそれにおいて最も不利に判断するその例（記憶上の諸現象）に関して、証明されているのを承認するだろうし、また精神を独立の实在に格上げする必要が課されるであろう。更にそのことによってまた、おそらくは人が精神と呼ぶものの性質と、精神と物質にとってのお互いに対して作用する可能性が、一部において解明されるであろう。なぜなら、この種の論証は純粋に消極的なものではないからである。記憶が何ではないかを知らしめた我々は、それが何であるかを探求する義務があるだろう。脳を含む身体に、諸作用を準備する唯一の機能を付与した我々には、確かにどうして記憶はこの身体と牽連しているように思われるのか、身体的な諸損傷はそれいかにして影響するのか、記憶はいかなる意味において、脳物体の状態に依うのかを探求することが課されるだろう。他方でこの探求は、我々に記憶の心理学的なメカニズムに関して、それに結び付く精神の様々な諸作用に関しても同様に、

我々に教えるには至らないというのは不可能である。そして反対に、もし純粹心理学の問題が、我々の仮説からある光を受けるように思われるならば、その仮説はそこで、それ自体を確実性と強固性とにおいて得るであろう。

(c) 脳による「純粹記憶」の不可能の検証が有する形而上学的意義

しかし我々は、記憶の問題が我々の目に、いかにして優先的な問題であるのかを十分に証明するために、なお第三の形式の下で、この同じ考えを提示すべきであろう。我々の純粹知覚の分析から生ずるもの、それはいわば分岐する（対立する説を否定するに至りえない）二つの結論であり、その一つは精神物理学の方向において心理学を超えており、他は形而上学の方向において心理学を超えており、その結果としてそれら二つの結論の両方が、対立する説を否定し自説を正当とするための、直接の心理学的検証を含んでいなかった。第一の結論は、知覚における脳の役割に関するものであった：脳は行為・作用の道具であって表象のではない。我々はこの命題の直接の追認を、事実要求しえなかった。なぜなら、純粹知覚は定義によって、我々の器官と我々の神経中枢にも現に作用している現在の諸客体を対象としており、そしてその結果としてすべてが常に、あたかも我々の諸知覚が我々の脳状態から発しているかのごとく、そして次にそれら知覚とは絶対的に異なるある客体の上に投影されているかのように生ずるからである。換言すれば、外的な知覚の場合において、我々が争った命題（仮説）（諸知覚は、諸客体について脳状態から絶対的に発した、広がりのない感覚・感情が、空間に投影されてある客体としての広がりをもつに至るとする命題—それに対する最も強い批判につき前掲（8）・[D]・(d)参照）と、我々がそれに代置する命題（仮説）（諸知覚は諸客体が我々の意識に、空間の形式により広がりのある様態・イメージとして受容されるように作用し、意識がそのようなものとして受容したものであるとの命

題) とが、正にどちらの側から考えるかという表裏の関係に過ぎないともいえるから、自らが正しいとする同様な結論に導くのであり、その結果として人はそれらの内の一方または他方のために、より高い解りやすさを援用しうるだけなのであって、経験の権威ではない。

反対に記憶のある経験的な研究が、それらを決しうるし決するはずである。実際に純粹記憶は、仮定により不在なある客体の表象である。もしも従来の理論がいうように、諸知覚は、諸客体の作用により脳状態から発した、広がりのない感覚・感情が、空間に投影されてある客体としての広がりをもつに至るのだとすれば、この同じ脳の活動は客体の欠如において、多少とも完全に繰り返されて、その知覚を再現するのに必要にして十分であるだろう。記憶はそれゆえ総体的に、脳によって説明されうるであろうから、ともかく精神の実在性を主張することはできないであろう。それゆえ客体が現存していることを前提とする知覚の面から、精神の実在性を問題とする限り、これを肯定する道は閉ざされているであろう。反対にもしも我々が、この問題を記憶の面から考究して、脳のメカニズムはある仕方
で記憶を条件付けるが、しかし記憶そのものはもはや脳にあるのではないこと（記憶は従来の理論が表象を生成すると主張している脳にあるのではなく、自由な行為をなそうとする精神のためにそこにあるということ）を経験の権威とともに（後出の失語症の症例などに基づいて）証明できるとすれば、人はそこから、脳が記憶の再生拠点ではないのと同様に、そもそも知覚そのものにおいても、脳はその生成拠点ではないこと、そしてその機能は単に現在の客体に対する我々の行為・作用を確保するための、情報の受容と伝達だったとの結論を、導きうるであろう。我々の前記した第一の結論（脳は行為・作用の道具であって表象のではない、そのためには精神の存在が必要である）は、そのようにして経験により検証されるに至るであろう。

更にそのようにして、脳にはそれに発する感覚・感情を空間に投影して

知覚としうるものではないことが検証されると、その際には以下のむしろ形而上学的な方面での第二の結論、即ち我々は知覚において、真実は我々の外に置かれている客体に触れるのであり、そして直接的なある直観（純粹持続において把握された知覚）において、その客体の実在性に、触れるのであるとの結論が残るであろう。ここでも、知覚の問題としていたのでは、ある実験的な検証は不可能である。なぜなら、客体の実在性が直観的に知覚されたのであれ、それが合理的に構築されたのであれ、それらはどちらの側から考えるかという表裏の関係にあるだけで、実践の結果は同じとされるだろうからである。しかしここでも、記憶の研究は二つの仮説をどちらかに決しうるであろう。実際に第二のそれ（客体の実在性は合理的に構築されたとの仮説）においては、知覚と記憶の間には強度の差だけが、より一般的には程度の差だけが、存在することになるだろう。なぜなら、それらは双方が、脳に発している 自足するであろう 諸表象の 諸現象であるだろうからである。もしも反対に我々が、記憶と知覚の間には単純な程度の差が存在するのではなく、記憶は知覚とは独立したもので、それに更なる何か（我々自身の「生」の歴史）を加えるものであるとの、性質上の根本的な差があることを心理学的な事実から見出すとすれば、諸推定は知覚に、記憶においてはいかなる程度でも存在しないあるもの、即ち直観的に把握される現にある客体のある 実在性を介在させる仮説（ベルクソンの採用する、知覚は現にある客体の実在性に一致するとの仮説）に有利であろう（知覚は記憶と程度ではなく性質が異なるとすれば、この点にその差異の根拠があるはずだから）。かくして記憶の問題は、それが検証不可能に思われるところの二つの仮説、そしてその第二は、むしろ形而上学的な方面で、心理学を無限に超えているように思われるところの二つの仮説の、心理学的な検証へと導くはずである点において、確かに真に優越的な問題なのである。

我々が従わなければならない前進は、それゆえすべて示されている。

我々は、人が記憶の物理学的なある解明を、そこから引き出すことが許されていると信ずるところの、通常の心理学あるいは病理学から借用された、様々な種類の諸記録を見分することから始めるだろう。この考察は、必然的に精細であり、そうでなければ無用であるだろう。我々はできる限り諸事実の周縁を子細に検討して、記憶の作用において身体の役割はどこで始まりどこで終わるのか、探求すべきである。そして我々が、この研究において我々の仮説の追認を見出す場合には、我々はためらわず更に先へと進み、精神の基本的な仕事をそれ自体において考察し、そしてそのようにして我々が精神と物質の諸関係について素描しているであろう理論を完成させる⁽²²⁵⁾。

IV 諸様態（イメージ）の蘇生（reconnaissance）について

—記憶と脳—

(1) 経験により検証されるべき記憶に関する諸命題

[A] 三つの命題の定式化

ベルクソンは、これから叙述する記憶の理論より帰結するはずの、三つの命題（仮説）をまず提示して、我々が経験によって検証しなければならない課題の内容を明らかにしようとする。これまでの考察から、脳を含めての身体は、諸客体からの諸運動を受け入れ、それが運動を押し止めないときにおいて、もしそれがなす行為・作用が自動的・反射的なものならば確定されているところの運動メカニズムに、もしその行為が意思的であるならば、蘇生される記憶を介して後に精神によりいくつかの内から選定される場所の運動メカニズムに、その意思的行為・作用を伝達する任務を負うある導き手（conducteur）にすぎないとの見通しに立つ仮説に、依拠してきた。ところで、我々の記憶は客体だけではなく、確かに我々の身体

(225) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.218 et suiv.

にも及んでいて、それを次のようにして覚えている。すなわち、それを取り巻くものの諸様態（イマージュ）と共に、これら様態（イマージュ）の内の一つ以外では決してないかのようにして、また我々の行為による取り巻くものへの作用・生成一般において、瞬時的な切り口をつけると、あらゆる瞬間に、それが中心を占めるかのようにして、覚えている。著者はこの場合について、それを「厳密な意味での過去の様態（イマージュ）」と位置付けつつ、そこには身体の様態（イマージュ）を中心としての作用・生成一般が入っていて、それが記憶の対象となっているからには、もはや身体が記憶しているのではなく、ある独立した記憶ともいべきもの（即ち精神）が主体となって、身体を含めての諸様態（イマージュ）につき時間に沿って、それらが生ずるのにつれて集めるかのように覚えていると、認めなければならないとする（後掲1）：2⁰に対応）。

他方ではまた、それと区別して、諸運動を受け入れる身体が、反応すべき諸運動メカニズムを保持するために、その作用を自らに刻印している（蓄えている）という意味での、保存された過去も存在する（前掲Ⅲ・（6）・[A]・（b）参照）—後掲1）：1⁰に対応。そこで、次の第一の命題（仮説）が定式化される。

1) —過去は二つの異なった形式で存続する：1⁰動的な諸メカニズムにおいて、2⁰独立な諸記憶において。

しかしそのときには、記憶の実践的な作用、それゆえまた通常的な作用、現在の行為のための過去の経験の利用、つまり蘇生は、二つの仕方ではなされるはずである。あるときは、それは作用そのものにおいて（客体からの作用・衝撃が、随意に身体に蓄積されている動的メカニズムを得るよう—前掲Ⅲ・（6）・[A]・（b）参照）、そして諸状況に適切なメカニズムの全く自動的な発動によって。あるときは、それは精神の仕事を、つまり現在の状況に最もよく挿入されうる諸表象を現在へと導くために、過去において探求するであろう精神の仕事を含むだろう。その帰結として、現在

において行為により実現される客体を、過去から蘇生させているものは、それが行為の客体から生じているときには、諸運動であり、それが行為の主体から生じているときには、諸表象によってなされることになる。それが次の第二の命題（仮説）である。

2) 一現在のある客体の蘇生は、それが客体から生ずるときには諸運動によってなされ、それが主体から発するときには諸表象によってなされる。

そこで最後に提起される問題は、現在の行為によって実現される客体の蘇生が、主体から発するいまの後者の場合に、その主体が依拠するそれらの表象はいかにして保存され、そしてそれらは動的なメカニズムといかなる関係を維持するかについて知ることである。著者はこの問題が、無意識を扱うであろう、そして基本において現在と過去との区別は何から成るのかを証明するときに、次の章（後掲V）でだけ深められるであろうとしながら、ここでは身体について、記憶との関係での新しい位置付けを示している。

「しかし今から我々は、身体について、それを将来と過去のある動く限界として、我々の過去が絶え間なく我々の将来に押し込む動的なある点として、論ずることができる。ある単一な瞬間において考察される私の身体は、それに影響を与える諸客体と、それが影響を与える諸客体の間に挿入されたある導き手（conducteur）であるに過ぎないが、これに対し経過する時間に移されたそれは、常に私の過去がそこで、ある行為に満了するに至る（現実化するに至る—筆者）正確な点に位置付けられている。そしてその結果として、私が脳の諸メカニズムと呼ぶ特別なそれら様態（イマージュ）は、あらゆる瞬間に、過去の私の諸表象の連続を、これらの表象が現在に送る最後の伸長を、それらの現実的なものとの、即ち行為との接触点を完結している。この諸表象の連続と最後に現実的となる接触を切りなさい。過去の様態（イマージュ）はおそらく壊されないが、しかしあなた方はその様態（イマージュ）から現実的なものに対して作用するあらゆる

手段を、従ってまた我々がそれを示すであろうように、実在化するあらゆる手段を取り上げる。脳のある損傷が記憶のあるものを廃棄しうるのであるのは、この意味においてであり、この意味においてのみである（諸記憶そのものを無くさせはしない—筆者）。そこから第三の最後の命題が生ずる。

3) 一人は気付き得ない程度に従って、時間に沿って配置される諸記憶から、その始まりかけている、あるいは可能な空間における行為を描く諸運動へと移る。脳の損傷は、これらの運動には達しうるが、しかしこれらの記憶にはない」⁽²²⁶⁾。

こうして、我々が経験により検証しなければならない課題の内容が、明らかにされたのであるが、ここで全体的な課題とされているものは、厳密な意味での記憶（過去の様態・イマージュ）は脳の諸メカニズムの内にあるのではない、という点の論証にあるだろう。以下では前出の三命題の各々について、より詳細な説明が順次になされてゆく。

[B] 第一命題（二つの形式の記憶）の詳細な説明

(a) 記憶の二つの形式の区別について

最初に、身体に習慣として刻印（蓄積）される記憶と、その身体とそれを取り巻くものとの様態（イマージュ）を日時と場所の区別により、歴史としてなす記憶とは、性質上の相違があることの対比的説明が、ある学課をそらんじようとする暗記を例として、綿密に展開される。私はある学課を勉強し、そしてそれをそらんじて暗記するために、私は最初に行と音節をはっきりと発音しながら、それを読む。続いて私はある回数それを繰り返す。各々の新たな読みで、ある進歩がなされる。言葉がだんだん良く読まれる。それら言葉がついに、一緒に体系化される。正にこのときに、私は私の学課をそらんじて知る。人はそれが記憶となったという。それは

(226) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.223 et suiv.

私の記憶に刻印されたという。

私は今や、その学課がいかに学ばれたかを探求し、そして私が順番に通過した諸段階を思い浮かべる。相次的な読みの各々が、その固有の個性と共に私の精神に戻る。私はそれをそれに伴う諸状況と共に、更にそれを枠づけている諸状況と共に再び理解する。その読みは先行するそれらと後続するそれらから、それが時間において占めている箇所そのものによって区別される。要するに、これらの読みの各々が、私の歴史の特定されたある出来事として、私の前に戻る。人はなお、これらの様態（イマージュ）が記憶であると、それらは記憶に刻印されたというだろう。人は二つの場合に、同じ言葉を用いる。確かに同じことが問題になっているのだろうか？

そらんじて暗記されたものとしての学課の記憶は、ある習慣のすべての性格をもつ。習慣としての記憶は、ある同じ努力の繰り返しによって得られる。習慣としてのそれは、身体のあらゆる習慣的な訓練と同様に、何かの衝撃によってその全体が自ずと展開しようようにするために、同じ順序で続けられ、同じ時間（間隔）を占める自動的な運動として、閉じられたある体系において、蓄えられる⁽²²⁷⁾。

反対に、これこれの出来事としての読みの、例えば第二のまたは第三の記憶は、習慣のいかなる性格も持たない。その様態（イマージュ）は必然的に初めてであるものとして、記憶に刻まれた。なぜなら、出来事としての他の読みは、定義そのものによって別な記憶を構成するからである。それは私の「生」での出来事である。それは日時をもち、その結果として繰り返されないのを本質とする。後の読みがそれに付け加えるであろうすべてのものは、出来事として先の読みの性質を変質させているだけであろう。

(227) 学課を暗記する目的は、何かのきっかけで、覚えた順序に従い、同じ時間を占めて、その全体が自動的に展開されるように、習慣として身体に蓄えさせることにある。

人はこの二つの記憶、学課のそれと読みのそれは、ただより多くより少なく異なっているだけだと、いうだろうか？相次的な読みの各々が、特に先行するものと、その学課がそこではより良く知られていることにおいて、異なっているのは疑いが無い。しかし、常に新たにされてだんだん良く暗記された、ある教課としてではなくみられるそれらの各々が、絶対的に自足しており、それが生じていたように存続し、すべての同時的な他の知覚と共に、私の歴史の還元しえないある瞬間を構成するものも確かである。人はまたより先へと進んで、意識は我々に二つの種類の記憶の間に、ある深い差異を、ある性質上の差異を示すといいうる。これこれの特定の読みの記憶は、ある表象でありそしてある表象でだけある。それは私が私の随意に長くしたり短くしたりできる、精神のある直観（純粹持続において把握された知覚—前掲注221参照）にとどまっている。私はそれに任意の持続を割り当てる。何ものも、私がそれを一挙に、ある絵におけるように見渡すことを妨げない。反対に、暗記される学課の記憶は、私が内的にこの学課を繰り返すことに限定する時でも、十分に特定されたある時間を、一つずつ展開するために必要な同じ時間を、たとえ必要な関連付けの諸運動が想像においてであるにすぎなくても、要求する。それゆえもはやそれはある表象ではなく、それはある行為である。そして実際に、一度暗記された教課は、それに対してその起源（習慣的起源）を裏切るような、それを過去に分類するようないかなる徴表も持ち合わせない。それは私の歩くあるいは書く習慣と同じ資格において、私の現在の一部をなす。それは表象されているというよりはむしろ、生きられた、行為されたのである⁽²²⁸⁾。

(b) 二つの形式の記憶の本質的な相違

著者の綿密な説明が、更に要約するところ以下のように続けられる。い

(228) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.225 et suiv.

まの例示にみる、二つの記憶の基本的な（理論的に独立な）区別は、我々の日常的な「生」においてなされていると述べている。第一のものは、我々の毎日の「生」の出来事のすべてを、それらが展開されるに応じて、「様態（イマージュ）－記憶（image-souvenir）」の形式で記録し、それはいかなる詳細も無視せず、各事実に、各振舞いに、その場所とその日時を残すであろう（もし必要なら後出の記憶の蘇生のプロセスにより現在に具象化するように残すであろう）。有用性や実践的な適用の底意なしに、それは過去を自然な必要（それが何であるかは後に検討される一次項（c）参照）の唯一の効果により、蓄えるであろう。

しかし他方では、知覚された諸様態（イマージュ）が、そのようにして記録され記憶に並べられるにつれて、それら諸様態（イマージュ）を伸ばしていた諸運動は、現在の行為となりうる始まりかけの諸運動を生じさせ、選択されるべきそれだけ多くの可能的反応として有効となりうるように、その記録される主体としての有機体の性質を変えて、身体に作用となるための新たな準備を生成させている。そのようにして、ある全く別な序列の、身体に沈殿する（蓄えられる）ある経験が、すべて準備が整えられえた一連のメカニズムが、それを通じてなされる外的な刺激への段々と多く多様な反応と共に、絶えず増加するある数の可能的な呼び掛けに完全な準備のある応答と共に、形成される（前掲Ⅲ・(4)・[B]参照）。我々は、これらのメカニズムを、それらが活動に入るときに意識し、そして現在に蓄えられているある過去の諸努力全部についてのこの意識は、確かなお記憶であるが、しかし第一のものとは深く異なっている記憶であり、常に行為に向けられていて、現在に立ち会い、将来だけを見ている。それは過去からその積み重ねられた努力を示す、賢明に整序された諸運動だけを保持する。この記憶は、これらの過去の努力を、それらを想起する「様態（イマージュ）－記憶」においてではなく、現在の諸運動がそれでもって行われる厳格な順序と、体系的な性格において、その努力を再び見出す。実を

言えば、それはもはや我々の過去を表示しない。それは過去を演ずる。そしてもしそれがなお記憶の名に値するとすれば、それはもはやそれが過去の諸様態（イマージュ）を保存しているからではなく、それがそれらの有用な効果を現時点にまで伸ばしてくれるからである。

これに対し、過去のありのままの様態（イマージュ）という形式で、記憶を喚起するためには、現在の行為の、有用な効果を捨象して、それからの束縛から離れる必要がある。代償から無益への愛着を、夢見することを、欲する必要がある。おそらく人間だけが、この種のある努力が可能である。なお、我々がそのようにして遡る過去は、つかみどころがなく、そしてあたかもこの背進的な記憶が、他のより自然な記憶、その全体運動が我々を行動すること、生きることへともたらす他の記憶によって妨げられているかのように、我々から常に逃れようとしていている。

心理学者達が、記憶を収縮した折り目のように、繰り返されることで段々と深く刻まれるある印象として語るとき、彼らは我々の記憶の巨大な多数が、本質的に日時をもち従ってまた決して再現されえない（繰り返されることのありえない）、我々の「生」の諸事象と詳細を対象としているのを忘れている。人が意図的に繰り返しによって得る諸記憶（意図的に学課をそらんじるような場合）は、まれで例外的である。反対に、それらの種類において統合的な、「諸事実と諸様態（イマージュ）-記憶」による記憶が、持続のすべての瞬間に続けられている。しかし暗記された諸記憶は最も有用なので、人はそれらにより多く注目する。そして同じ努力の繰り返しによるこれらの記憶の取得は、習慣について既に知られているプロセスに類似することから、人はより好んでこの種の記憶を第一級に押し上げ、模範的記憶に格上げし、そして自然発生的な記憶には、始まりかけの状態でのこの同じ現象、そらんじて暗記されるある学課の始まり以外のものを、もはや見なくなるのである。しかし、繰り返しによって構成されるものと、本質的に繰り返されえないものとの差異を、承認しなければなら

ない。自然発生的な記憶は、即座に完全である。時間はその様態（イマージュ）に、それを変性することなしには、何も付け加ええないだろう。時間はその記憶のために、その場所と日時を保存するだろう。反対に暗記される記憶は、その学課がよりよく知られるにつれて、時間（持続）から生ずるであろう。それは段々と非個人的になり、段々と我々の過去の「生」と無縁になるだろう。繰り返しはそれゆえ、なんら第一のもの（記録する記憶）を第二のもの（暗記による記憶）に変ずる効果をもたない。その繰り返しの役割はただ、ある自動的に展開しうるメカニズムとしての習慣を生成することのみである。この習慣は他方で、私がそれによって獲得したことをそらんじて覚えているがゆえにだけ、記憶なのである。そして私はその習慣を修得したことを覚えているのは、私が自然発生的な記憶に、諸事象に日付を与える、それらを一度だけ記録する記憶に、私が訴えるがゆえにだけなのである。我々が区別したばかりの二つの記憶の内ですれゆえ、記録する記憶が確かに優れての記憶であるように思われる。暗記による記憶、心理学者が通常的に研究しているそれは、記憶そのものであるよりはむしろ、記憶によって明瞭化された習慣なのである⁽²²⁹⁾。

（c）二つの形式の記憶が果たす役割

それでは、これら二つの記憶が果たす役割は何か。ここでも、著者の説明を要約的に掲げたい。そらんじて暗記されるある学課の例は、かなり人為的であるにせよ、しかし我々の存在は、多かれ少なかれ頻繁に我々の前を再び通過する、限定された数での諸客体の中で経過し、それらの各々が、それが知覚されると同時に、我々の側に我々がそれによってそこで自分を適合させるところの、少なくとも始まりかけの諸運動を生じさせる。繰り返されることでこれらの運動は、あるメカニズムに生成され、習慣の状態

(229) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.227 et suiv.

に移り、そして我々の下で諸事物の知覚に自動的に従う諸姿勢を確定する。我々の神経組織は、他の使用にはほとんど当てられず、感情神経は懸命にその道筋を選んだ後に、繰り返しによって生成される運動メカニズムに伝達されるある刺激を、脳にもたらず。そのようにして適切な反応、周りとの均衡、一言では「生」の一般的な目的である適合が生ずる。そして生きることに満足するであろうある生きている存在は、他のものを必要としないであろう。

しかし、動的な諸習慣の形式の下で、繰り返しにより過去の記録に到達する、知覚との適合のこのプロセスが続けられると同時に、他方で意識は順番にそれらが通過した諸状況の様態（イメージ）を保持し、それらをそれらが引き続いた順番において並べる。これらの「様態（イメージ）－記憶」は何の役にたつのだろうか？記憶において保存され、意識において再現（蘇生）されうるそれらは、現実に対し夢を混ぜ合わせることで、「生」の実践的な性格を変質させないのであるだろうか？おそらく、もし我々の今の意識、我々の神経組織の現在の状況の適合を正確に反映している意識は、過去の様態（イメージ）で現在の知覚に整序されない、それと有用なある総体を形成しえないすべてのものを、排除するのだとすれば、そうであるだろう（「様態（イメージ）－記憶」は排除され、「生」の性質を変質させたりはしないであろう）。精々が、いくつかの混乱した記憶、現在の状況との関係のない知覚は、有用に組み合わせられた諸様態（イメージ）を超えて、それらの周りにある巨大な曖昧な圏において見失われるであろうところの、より明確でない外縁を描く。

しかし、脳によって外的な刺激と動的な反応との間に維持されている均衡を乱す、ある事件がやってくる。「少しの間、周辺部から中枢を通して周辺部に進む諸々の糸の緊張を緩めなさい。間もなく曖昧化されていた諸様態（イメージ）が、いっぱい光で押し進むであろう。：おそらく、この最後の状況が現実化されるのは、そこで人が夢見る眠りににおいてであ

る。我々が区別した二つの記憶の中で、能動的あるいは動的な第二のもの（諸習慣として保持されている記憶—筆者）はそれゆえに、恒常的に第一のもの（記録による記憶—筆者）を抑制し、少なくともそれから現在の状況を有用に明瞭化するもの、補完するものだけを受け入れるはずであろう。：そのようにして観念連合（association des idées）の諸法則が導かれる」⁽²³⁰⁾。

だが著者はここで、人がこのはかない記憶で蓄えられた様態（イマージュ）について、運動を通じての現在の知覚との結合による奉仕とは独立に、安定した「生」のメカニズムを構成するために、役立てうると予想する。「しかし、自然発生的な記憶によって蓄えられた諸様態（イマージュ）は、それらが現在のある知覚との結合により与えうる奉仕とは独立に、なお別な使用を有する。おそらくそれは、夢の様態（イマージュ）である。おそらくそれらは通常的には、我々の意思とは独立に現れ消える。；そしてそれが（自然発生的に蓄えられた諸様態が、意思とは独立に現れ消えることが—筆者）、正に我々があるものを知るために、それを支配下に保持するために、そらんじて暗記すること、即ちそのような様態（イマージュ）を、それを補完しうる動的メカニズムに代えるように余儀なくされる理由である。しかし、その様態（イマージュ）そのものを、限定されたある時間の間、我々の意識の視線の下に保持するのを可能とする、独自の種類のある努力（後出 [C]・(b)・ γ でいわれる客体と精神の間に成立する諸回路を通じての「注意」を指すと思われる—筆者）が存在する。；この能力のお陰で、相伴う諸運動を習慣において体系化するために、我々は同じ諸状況の偶然的繰り返しを、偶然から（日常の生活が繰り返させる偶然から—筆者）期待する必要がなくなる。；我々は、偶然的な繰り返しによる習慣化に取って代わる、安定したあるメカニズム（不確定な・

(230) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.229 et suiv.

自発的選択可能性ある行為のための一筆者)の構成のために、(ある限定された時間の間にだけ意識の下に保持されている一筆者)そのはかない(夢の一筆者)様態(イマージュ)を役立てる。—それゆえ結局のところ、あるいは我々の独立した二つの記憶の区別が根拠付けられないか、あるいはもしその区別が諸事実に対応しているのであれば、我々は神経組織の感覚運動性の均衡が乱されているであろう多数の場合において、自然発生的な記憶の高揚を確認し、反対に通常の状態においては、現在の均衡を有効に強固にしえない自然発生的なすべての記憶の抑制を確認し、最後に人が「記憶-習慣(souvenir-habitude)」をそれによって収縮する作用において、「記憶-様態(イマージュ)」の潜在的な介入を、確認するはずであろう。諸事実はその仮説を追認しているか？」⁽²³¹⁾。

(d) 二つの形式の記憶の並存性

しかし上記の問題は、当面の間は詳細に取り扱わず、記憶の諸混乱と観念連合の諸法則の研究に回して、これから著者が論ずるのは、覚えられた物事に関して、先の二つの記憶がここではいかに並んで進み、ある互いの支えを与え合うかについてである。

最初に習慣としての記憶の自動性の進行がどれほどか、自発性の能力を失っている痴呆症(認知症)患者や失語症患者の観察において取り上げられる。「動的な記憶に叩き込まれた諸学習は、自動的に繰り返されるということ、それは毎日の経験が示すものである。；しかし病理学的な諸場合の観察は、自動性がここでは我々が考えるより、ずっと先に及んでいる事実を証明する。人は痴呆症(認知症)患者が、彼らが理解しなかった諸問題のある連続に、賢明な諸解答をなすのを見た。言語が彼らの下では、ある反射の仕方では機能していた。ある語を自発的に発音しえない失語症患者

(231) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.230 et suiv.

が、誤りなく彼らがメロディーを歌うときには、その歌詞を覚えている。あるいは更にまた、彼らはある祈禱を、数の連続を、週の日と年の月を暗唱するだろう。ある極度の錯綜の諸メカニズム、理解を模倣するに十分に微妙な諸メカニズムが、一度構築されるとそれ自体で機能し、従ってまた通常は意思の最初の衝動にのみ従うのである」⁽²³²⁾。

しかし、この習慣としての記憶をなすために、我々はどうして苦勞するのだろうか？「我々がある教課を暗記する練習をするときには、例えば我々が諸運動によって再構成しようと努める視覚的あるいは聴覚的な様態（イマージュ）は、既に我々の精神においては、みることのできないそしてまた現存するものなのではないのだろうか？最初の暗唱の時から、我々はある曖昧な不安の感情で、我々が犯したばかりのこれこれの誤りを認識し、それはあたかも我々が意識の曖昧な深部から、（暗記しようとしている様態・イマージュが意思にもはや従わない、無意識な記憶に逃れてしまうよという一筆者）ある種の忠告（*avertissement*）を受けるかのようである。そのときには、あなた方が感じているものに集中せよ、あなた方は完全な様態（イマージュ）がそこにあるのを、しかしあなたがたの動的な活動が、そのシルエットを確定しようとする正にその瞬間に消える（意思に従わなくなる一筆者）、はかない、真の幽霊を感じずであらう」。

更に著者は、暗記するための諸運動を一部に限られたある実験で、いまの印象が感じられたはずの結果を紹介している。「最近の、他方で全く別な目的において企てられた諸実験の途中で、諸主体がこの種のある印象を正に感じると宣告するであらう。人は数秒の間、彼らの目に人が彼らに保持するように要求した一連の文字を、表させた。しかし彼らに、適切な接合の諸運動により、知覚された諸文字を際立たせるのを妨げるために（適切な接合運動により暗記されるのを妨げるために一筆者）、人がある音節

(232) Bergson, *Matière* (前掲注161参照) p.231 et suiv.

を彼らがその様態（イマージュ）を見ている間に、恒常的に繰り返すように要求した。そこからは、諸主体が視的なその様態（イマージュ）の完全な保有にある自己を感じているが、しかしながらその最小部分も望まれた時に、再現することができない、特殊なある心理学的な状態が生じた。：彼らの大きな驚きにおいて、その行（としての様態—筆者）が消滅した（意思の支配下から去った—筆者）。彼らの内の一人の言では、その現象の基礎に、ある総体の表象が、全体を含むある種の複合的な想念（idée）が、そしてそこでは諸部分が言語に絶して感じられるある一体性を有しているところの想念（もはや意識に従わない記憶となったものが、もたせているであろう諸部分の一体性を有している想念—筆者）が、存在していた」⁽²³³⁾。

こうして、覚えることの運動から切り離された様態（イマージュ）は、常に新たに生ずる現在の状況に適合する行為のプロセスとしての記憶を逃れて、諸部分が言語を絶した一体性ある（もはや「記憶—習慣」とは相容れない）想念となることで、現在の「生」を一方で混乱させないことにより、そして他方で現在の行為のための記憶の方は、「様態（イマージュ）—記憶」の内に自らを残す（この記憶は何かの役割を果たすはずである）ことにより、両者の記憶が支え合っている事情となろう。著者の表現は実証的であるが、その分かなり難解である。

「この自然発生的な記憶は、おそらく獲得される記憶の背後に隠れていて、突然の稲妻によって現れうる。しかし意図的な記憶の最小限の運動からも、それは逃けている。もし主体が彼がその様態（イマージュ）を保持していたと信ずる諸文字の連続が、消滅するのを見るとすれば、それは殊にそれら（のある音節—筆者）を繰り返し始める間である。：この努力が（その音節以外の一筆者）残りの様態（イマージュ）を、意識の外に押し

(233) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.232 et suiv.

やるように思われる。いまや記憶術の想像力豊かな諸手続きを分析せよ。あなた方はこの学が、正に隠れている自然発生的な記憶を第一線へと導くこと、そしてそれをある能動的な記憶として、我々の自由な支配下に置く目的のものであるのを見出すであろう。：そのことのために、最初に行為するあるいは動的な記憶（暗記による記憶—筆者）のあらゆる思念を、人は最初に排除するであろう。ある学者のいう精神的写真の能力は、意識に属しているというよりは副意識（subconscience）にむしろ属している。それは意思の訴えには困難に従う。その能力を行使するために、人は例えば複数のグループの諸点を一挙に、それらを数えようと考えるのでもなしに保持することに、慣れてはいるはずであろう。この記憶を陶冶するためには、いわばその瞬時性（意思の支配を逃れたときに副意識において記憶が保持されるはずの瞬時性—筆者）を模倣する必要がある。さらにこの記憶は、その表示において気まぐれなままであり、そしてそれがもたらす記憶は夢のあるものをもつから、精神上の「生」へのそれのより規則的な侵入が、知性的な均衡を深く乱さないことはまれである」⁽²³⁴⁾。

(e) 二つの形式の記憶の新たな考察方法

この記憶とは何か、それはどこから由来するのか、それはいかにして生ずるのか、これらは次章（後掲V）に回され、とりあえず二つの記憶について、図式的な見解が示される。これまでのところから過去は、確かに予見していたごとく、二つの両極の形式で——一方ではそれを利用するための動的メカニズムの形式で、他方ではそのすべての諸事象をそれらの輪郭、それらの色、そしてそれらの時間における位置と共に描く人的な「諸様態（イメージ）—記憶」の形式で—蓄えられるとという。努力によって勝ち取られた第一のものは、無意識へと移ることなく、我々の意思の従属

(234) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.233 et suiv.

下に残る。全く自然発生的な第二のものは、保存することの忠実性と同等の蘇生することの気まぐれ性をもたらす。諸様態（イマージュ）の記録としての第二のものが、運動メカニズムとしての第一のものに与えうる唯一の規則的で確かな奉仕は、その選択を啓発するために、現在の状況に類似する諸状況について、それが諸想念の結合の形式で記録していた、それら類似する諸状況に先行するもの、後続するものの諸様態（イマージュ）を第一のものに示すことである（記憶が蘇生して現在の行為・運動メカニズムに入り込もうとする場合ではなく、逆にそれを排除して意識が現在のその従属化にある運動メカニズムとしての記憶・習慣を、現在の状況において繰り返して習慣的に発動しようとする場合—意図的な記憶・習慣の使用の場合—には、その繰り返される運動メカニズムの現在の記憶・習慣を生じさせた過去の類似した諸状況とそれの先後の諸様態を、習慣的繰り返しの啓発のために回顧することまではできる）。思い出す記憶（第二の記憶）が、規則的に繰り返す記憶（第一の記憶）に服する、他の場合は全く存在しない。それゆえ、純粹状態（まぜものではない状態）で見られた記憶には、現在の運動メカニズムに結ばれるものと、もはや過去の記録として、現在に気まぐれ的に様態（イマージュ）として蘇生されうるだけのものの、二つの両極端な形式が存するとされる。

そしてその観点から、これまでの考察方法を批判しつつ、正しい方法を提示する。「人が記憶の真の性質を無視してきたのは、中間的な形式にそしていわばまぜものの形式に依拠するゆえであった。最初に二つの要素、『様態（イマージュ）—記憶』と運動（メカニズムとしての記憶—筆者）を分けて、次にいかなる諸作用の連続によって、それらが元々のそれらの純粹性を放棄してお互いの内に流れ込むのか（後掲 [C]・(b) および [D] 参照—筆者）を探求する代わりに、人はそれらの合体から生ずる現象だけを考察する。混合的であるこの現象は、一方を通じて動的なある習慣の側面を、他方を通じて多少とも意識的に位置付けられたある様態（イ

イメージ)の側面を提示する。しかし人は、それが単純な現象であることを望む。それゆえ、動的な習慣の基礎の役割をなす脳の、脊髄の、あるいは延髄のメカニスムは、同時に意識的な様態(イメージ)(・記憶—筆者)の基体であると仮定する必要があるだろう。そこから、真の奇跡によって意識的となるであろう、そして我々をある神秘的なプロセスによって過去へと導くであろう、脳に蓄えられた記憶の奇妙な仮説が生ずる。ある人たちは実際に、更にその作用の意識的な側面に固執し、そしてそこにある付帯現象以外のものを見ようとするだろう。しかし彼らは、相次的な繰り返しを保持し並べている記憶(例えば前出の、学課をそらんじるための各読みの様態の記録としての記憶—筆者)を、区別することから始めず、彼らはそれを修練が完全にする習慣と、『様態(イメージ) - 記憶』の形式の下に一緒にするから、彼らは繰り返しの効果は繰り返されることで補強されるだけの、ある唯一の同じ不可分な現象を対象としていると信ずるように導かれる。：そしてこの現象は、目に見えて遂にある動的な習慣とだけなって終わるから、そしてまた脳のあるいは他のあるメカニスムに合致して終わるから、彼らは好むと好まざるとにかかわらず、この種のあるメカニスムが、始めから様態(イメージ)の基礎にあったと、そして脳は表象のある器官であると、仮定することへと導かれる(前掲Ⅲ・(9)・[D]・(c)参照—筆者)。我々はこれらの中間的な諸状態を考察し、それらの各々に、始まりかけの作用の、即ち(運動メカニスムとしての記憶を統率する—筆者)脳の考慮をなし、そして独立の記憶の、即ち『様態(イメージ) - 記憶』の考慮をなすであろう。これらの(中間的な—筆者)状態はいかなるものか?ある面によって動的なそれらの状態は、我々の仮説によれば、現在のある知覚を延長する(保ち続ける—筆者)はずである。しかし他面ではそれらは、諸様態(イメージ)として、過去の諸知覚を再生するであろう。ところで、過去を現在において再度捉える具体的な行為は、蘇生である。それゆえ我々が研究すべきなのは、蘇生であ

る」⁽²³⁵⁾。

[C] 第二命題（記憶の蘇生一般）の詳細な説明

(a) 既視感との関係での記憶の蘇生

ある知覚との関係でなされる、過去の知覚についての記憶の蘇生にあつては、それら双方の知覚の様態（イマージュ）における、客観的類似性の感覚と同等な意味での既視感（*déjà vu*）が、生ずるだけなのであろうか。それとも精神が、意思の支配を逃れて、意識から無意識に沈むに至っている過去の知覚を、ある知覚との関係で記憶の内に主体的に見つけ出し、意識化に成功して初めて、単なる客観的類似性の感覚とは異なる、意識化により無意識に沈んでいる過去に出会ったという感覚（印象）としての既視感が生ずるものなのだろうか。もし、我々が現に感じている既視感を自己省察して、それは単に客観的類似性が現在の知覚を過去の知覚に結合させているとの印象なのではなく、精神が記憶の能力により、ある現在の知覚との関係で、過去の事実を過去において主体的に見付け出し、意識化したときにだけ生ずる特別な印象であるのを確認しうれば、精神の實在（記憶の能力をもち、そしてそこに過去の事実を過去において見付け出し、蘇生させうる主体としての精神の實在）を疑いえないはずである。

著者は、通常に言われている既視感とは、いま説明したばかりの精神による主体的な過去の事実の思い出し（意識化）によって生ずる、特別な印象のことはないか、その点について既視感を伴わないはずの、客観的類似性によってだけ過去の知覚と同時的な諸状況が我々の精神にやってきて、それらが自らを描くことで現在の知覚と結合させているという場合（記憶を脳の機能とする心理学が行き着くであろう結合理論—後述）における蘇生の仮定例との対比で、おおよそ以下のように読者に確認させようとする

(235) Bergson, *Matière* (前掲注161参照) p.234 et suiv.

る：私はある人物に最初に出会う。私は単に、彼を知覚する。もし私がその人物に再会するとすれば、私は彼を最初の知覚の同時的な諸状況が、私の精神にやってきて、現在のその様態（イマージュ）の周りに、現在知覚されている枠組みではないある枠組みを描くという意味において、私は彼を蘇生させた。それゆえこの場合において、蘇生させるとはある現在の知覚に、かつて与えられていた諸様態（イマージュ）を、それとの類似性において結合することであるだろう。しかし、人がそのことを正当に観察させたように、既視感（更新されたある知覚）が生じたといえるのは、最初（過去）のである彼の知覚が、それに類似する現在の状態によって、初めに想起されている（過去に見出されている）場合だけである。最初にその人物に関する知覚Aがあるとせよ。同時的な諸状況B, C, Dは隣接性によって、それに結合されたままである。もし私が新たにされた同じ人物の知覚をA'と呼ぶとすれば、項B, C, Dが結ばれているのは現在の知覚A'ではなく過去の知覚Aなのであるから、現在のA'に、客観的類似性が原因となって、過去のB, C, Dと結合する仕方では、通常的な意味でいわれる、そしてそのような意味での感情の現存が通常的に確認されている既視感を、決して生じさせないであろう。我々が既視感をもつのは、現在の知覚A'との類似性によって、最初に我々が過去の内にある知覚Aを思い出して（見出して）、それと共に過去の内のB, C, Dをも想起する（見出す）ことが必要である。虚しくも人は、A'はAと同一人物であるから、A'とB, C, Dの結合で既視感が生じていると主張するだろう。しかしA'は知覚なのに対しAはもはや記憶に過ぎないという単純な事実によって異なっている以上は、現在の知覚に関係して過去を過去において見出したのではないから、通常的な意味での既視感は、その仕方では感じうるものではないはずである⁽²³⁶⁾。

(236) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.235 et suiv.

更に、既視感の通常的な第二の説明（いまの第一の説明は結局こちらに帰着するという）との関係で、より明瞭な解答が示され、そこにはこれまでの誤った心理学における見解の批判が含まれる。「今度は、現在の知覚が常に、記憶の底にそれに類似する以前の知覚の記憶を探すと、人は仮定する。『既視感』の感情は、その知覚とその記憶との並置あるいは融合から生ずるであろう。おそらく、人がそのことを深く観察させたように、その類似性は精神が比較し、従ってまた既に所持している諸項の間に、精神により確立されるある関係であり、その結果としてある類似性の知覚は、結合の原因であるよりはむしろ、結合の結果である。しかし、この確定され知覚された類似性、精神によって把握され抽出されたある要素の共有からなる類似性と並んで、曖昧なそしていわば客観的な、諸様態（イマージュ）そのものの表面に広まっている、そして相互的な誘引の物理学的なある原因として作用しうるある類似性が存在する。我々は、ある客体のある古い様態（イマージュ）と（精神が記憶の内での見出しにより—筆者）同一化するのに成功するのでなしに、それをしばしば蘇生させると申し立てるだろうか？人は、一致するであろう脳の諸痕跡の、修練が容易にするであろう脳の諸運動の、諸記憶がそこに眠る諸細胞と交流している知覚の諸細胞の、便宜な仮説に駆け込むだろう。実を言えば、好むと好まざるとにかかわらず、蘇生の理論のすべてが見失われるに至るのは、これらの心理学的な諸仮説においてなのである。それらの仮説はあらゆる蘇生を、知覚と記憶のある（客観的—筆者）比較から生じさせようと望む。しかし他方で、大抵は記憶（souvenir）が、知覚が認められたならすぐにだけ、生ずることを証言する経験がそこにある。それゆえ確かに、人が最初に諸表象間の結合として告示していたものを、諸運動間の組み合わせ、あるいは諸細胞間の接合の形式で、脳の内に投げ返し、そして我々に従えば非常に明確な蘇生の事実を、我々の意見では非常に曖昧な、諸想念を蓄えるであろうある脳の仮説によって説明するように、余儀なくされるのである」⁽²³⁷⁾。

(b) 記憶の蘇生のプロセスとそれに基づく定義

だが、記憶の蘇生のプロセスを、脳における知覚と記憶の結合に求める説では説明のつかない事例があり、それは精神盲の症例である。「しかし現実には、知覚のある記憶との（客観的な一筆者）結合は、蘇生のプロセスを説明するには全く十分ではない。なぜなら、もし蘇生がそのようななされるのなら（脳の中で知覚と記憶との結合によってなされるのなら一筆者）、蘇生は（脳において一筆者）旧い諸様態（イメージ）が消滅するときには廃棄されるであろうし、これらの様態（イメージ）が（脳において一筆者）保存されているときには常に生ずるであろう（道理となる一筆者）からである。精神盲、即ち知覚された諸客体を蘇生することの無能力は、それゆえに視覚的な記憶（*mémoire*）の抑止をしなければ進行しない（脳による視覚的記憶機能が認められる人には精神盲は進行しないはずである一筆者）ことになるだろうし、そして特に（脳による一筆者）視覚的な記憶の抑止は不変に精神盲を効果としてもつことになるであろう。ところで経験は、これら二つの帰結のどちらも検証しない（脳の視覚的記憶の機能が抑止されていないと認められる人にも、その記憶に含まれているはずの旧い過去・事実そのものを蘇生（現在化）することだけが妨げられている精神盲が進行する場合があります、他方で脳の視覚的記憶の機能が抑止されていると認められる人でも、不変な精神盲となるのではなく、ある一部の旧い過去の記憶を蘇生・現在化する能力は妨げられていない精神盲である場合が存する一筆者）」⁽²³⁸⁾。

(237) Bergson, *Matière* (前掲注161参照) p.236 et suiv.

(238) Bergson, *Matière* (前掲注161参照) p.237. もし脳のプロセスによって、視覚的記憶機能（記憶を保存する機能）と記憶の蘇生が行われるなら、それらの一方があり他方はないことは、ありえないはずだが、実際にはそのような症例がありうる。「ヴィルブランド（Wilbrand）により研究されたある症例において、患者は目を閉じて彼女が住んでいた街を描き、想像でそこを散歩することができた（脳による記憶を保存する能力・視覚的記憶機能はあると認められた一筆者）。通りに出るなり、

結局のところ、諸想念を蓄えるであろうある脳の仮説は、それによって説明しえない経験に突き当たる。そこで次には、それに代わるべき仮説である蘇生理論において、蘇生とは何なのか、我々はそれをいかに定義す

彼女にはすべてが新しいように思われた。；彼女は何も蘇生させなかったし、また自分の方向を定めるには至らなかった（古い過去を意識において蘇生させる、おそらくは精神の能力はなかった—筆者）。同じ種類の諸事実が、ミュラー（Fr. Müller）とリソーア（Lissauer）によって観察された。患者達は人が彼らに指定するある客体の、見たものは内的に想起しうる。彼らは非常に良くそれを描く。しかしながら彼らは、人がそれを彼らに提示するとき、それを蘇生させることができない、視覚的なある記憶の保存は意識していても、ある類似する知覚の蘇生には十分ではない（脳による記憶を保存する機能・視覚的記憶機能は認められても、蘇生により過去の類似した客体の知覚を、意識において想起する、おそらくは精神の能力は十分ではない—筆者）。しかし反対に、シャルコ（Charcot）により研究された事例において、そして視覚的諸様態（イマージュ）の完全な欠落（脳による記憶を保存する能力の完全な欠落—筆者）の古典的となった事例において、諸知覚のすべての現在における蘇生が廃棄されているわけではなかった（既に有していた過去の諸知覚の意識における蘇生は、なお一部において出来ていた—筆者）。人はそのことを、この事例の関係を子細に読むことで、容易に納得するであろう。その主体は、おそらくもはや、生まれた街の諸々の通りを、彼がそれらの名をいうことも、そこで方向を定めることもできなかったことにおいて、（過去を諸様態・イマージュの同一性までにおいて—筆者）蘇生はしていなかった。しかし彼はそれが通りであるのを知っていたし、また彼が家を見たことを知っていた（過去の有していた通りや家の観念・意味内容を想起する、おそらくは精神の能力は失っていなかった—筆者）。；彼はもはや彼の妻もそして彼の子供たちも（諸様態・イマージュの同一性においては—筆者）蘇生させていなかった。しかしながら彼は、彼らを知覚して、それが妻であるということ、それが子供達であることはいいえた（過去に有していた妻と子供という観念・意味内容は蘇生しえた—筆者）。もし言葉の絶対的な意味で精神盲が存在していたのなら、そのことすべてのいかなるものも、可能ではなかったであろう。廃棄されていたもの、それは我々が分析しなければならないであろう、ある種類の蘇生であって、蘇生の一般的能力ではなかった。あらゆる蘇生が、常にある古い様態（イマージュ）の介在を含むのではないということ（古い様態・イマージュと現在の知覚との同一化までを必ず必要としているのではないこと—筆者）、そして人は諸知覚をこれらの様態（イマージュ）と同一化するのに成功することなく、（現在においてなお何かを思い出すために—筆者）これらの様態（イマージュ）に同様によく訴えうることを結論しよう」（Bergson, Matière（前掲注161参照）p.237 et suiv.）。

るのか、現在の運動メカニズムに結ばれる記憶（その順序やそれが占める時間の間隔によって、システムとなって体に蓄積されていて、いつでも現在の運動として発動されうる記憶）と、もはや過去の記録として、現在に気まぐれ的に様態（イマージュ）として蘇生されうるだけの記憶の順番で、その考察が進められる。

a 行為の自動化に向かわせる記憶において

初めに、行為の自動化に向かわせる前者の記憶において、諸知覚が身体を適切な機械論的反應へと進ませるために、それら知覚が精神にまで、体系化された動的な反應の現象（思惟される対象である現象）としての意識をもたせている必要があるか、即ち精神による現象としての意識化が、その反應とそれら知覚の親密性を基礎付けることで、いつでも「生」の実践的必要に応じて、動的反應の体系を瞬時に生じさせたり、準備させたりする、記憶の蘇生を、人は行いえているのか、それとも実践的な反射的反應が、その蘇生の基礎であるのかが問われる。この点の検証のためにはそれゆえ、初めには選択による行為をなしている段階から、次第に身体の機械論的反應が、身体の自動的な運動メカニズムに発展する以前の中間的状況において、諸知覚が精神に体系化された動的反應の現象（思惟される対象である現象）としての意識を生じさせているか否かに、焦点を合わせる必要がある。「例えば私は、ある街で最初に散歩する。通りの各々の曲がり角で、私がどこに進むか知らずに、私は躊躇する。私は不確実の内におり、そして私はそれによって、諸選択肢が私の身体に提示されていること、私の運動はその総体において不連続であること、振舞いの一つに、来るべき振舞いを知らせるそして備えるいかなるものも存在しないことを理解する。より後に、その街でのある長い滞在の後に、私はそこで私がその前を通り過ぎる諸客体の個別的な知覚をもつことなしに、機械的に巡回するだろう。ところで、これら両極端な状況の間に、つまり知覚がまだそれに伴

う定まった諸運動を体系化していなかった一つと、同時的なこれらの諸運動が私の知覚を無用とするまでに体系化されている他のものとの間に、中間的なある状況が、そこでは客体が知覚されているのだが（無用とまではされていないが—筆者）、しかし（既に—筆者）それらの間で結ばれ継続されているところの諸運動、お互いに統制し合っている諸運動を引き起こしているという中間的なある状況が存在する。私は、私の知覚を区別していただけた、ある状態から始めた。私はもはや私の自動性以外にはほとんど意識しないある状態で終わる。：その間隔の内に、ある混合的な状態が、始まりかけたある自動性によって際立てられたある知覚が、場所を占めた。ところで、もし後の（混合的な状態でおなされている—筆者）諸知覚が最初の（選択による行為をなしている段階の—筆者）諸知覚と、それらが身体を適切な機械論的の反応へと進ませることにおいて、異なるものならば、他方で、これらの新たにされた諸知覚が、見慣れたあるいは覚えられている諸知覚を性格付ける（認識させる—筆者）、独自の側面を伴って、精神に現れるのだとすれば、我々は十分に律せられた動的なある付随物という意識が、体系化されたある動的な反応という意識が、その（諸知覚と反応との—筆者）親密性の感情の基本と推定すべきではないのか？蘇生の基礎には、それゆえ（精神に意識された—筆者）動的な方面でのある現象（体系化されたある動的な反応という現象—筆者）が存在するであろう」。

しかし著者は、第一の記憶の蘇生の基礎となっているものが、体系化されている動的な反応の現象（思惟の対象である現象）としての意識であるとのかかる理解を否定し、そうではなく客体の使用を主宰する意識という実践的見地から、この場合には反射の仕方では知覚に従う、（体系化された運動の）始まりかけの諸運動の意識だけが、蘇生の基礎にあるとの、詳細な説明をなす。「ある通常的な客体を蘇生させるとは、殊にそれを使用できることから成る。そのことは大いに真実であり、最初の観察者達が我々が精神盲と呼ぶこの病気に、行為不能症の名を与えたほどである。しかしそ

れを使用しうるということ、それは既にそれに適合する諸運動を素描することであり、それはドイツ人が動的諸衝動（Bewegungsantriebe）と呼ぶものの効果によって、ある振る舞いをとること、あるいは少なくともそれへと緊張することである。その客体を使用する習慣は、それゆえ遂に諸運動と諸知覚とを一緒に体系化するようになり、そしてある反射の仕方知覚に従うであろう、この始まりかけの諸運動の意識が、ここでも蘇生の基礎に存するであろう。

運動に伸びない知覚は存在しない。リボ（Ribot）とモーズレイ（Maudsley）は、ずっと以前からこの点に注意を引いてきた。感覚の教育は正に、感覚的な衝動とそれを利用する運動の結び付けの総体から成る。衝動が繰り返されるにつれて、結び付きも強化される。その際のメカニズムは他方で、何ら神秘的なものもたない。我々の神経組織は明らかに、動的な機構の構築に向けられた感覚的刺激に、諸中枢を介して結ばれており、そして神経諸要素の非連続性、おそらく様々に接近しうるそれらの樹状突起の多様性は、諸衝動と対応する諸運動の間の結び付きの数を無限にする。しかし、構築途上のメカニズムは、構築されたメカニズムと同じ形式の下で、意識に現れることはできないであろう（特に始まりかけの諸運動とというものが現れるのは、既に後者の構築されているメカニズムの場合だけであろう—筆者）。あるものが、人体において統合された運動の諸システムを深く区別し、明確に示す。それは特に、我々は信ずる、その序列を変えることの困難である。それはさらに、先行する運動の内での引き続く運動の先形成、部分が潜在的に全体を含む、暗記されているメロディーの各々の音符が、その履行を監視するために、次の音符に傾けられたままであるときに起きるように含む、先形成である。それゆえもし、あらゆる通常の知覚が、（既にその内に—筆者）体系化されたその動的な付随物を有しているとすれば、通常の蘇生の感覚は、その根をこの体系化の意識（および体系化を前提としたその始まりかけの運動の意識—筆者）にお

いてもつであらう。

それは我々が、通常是我々の蘇生を（現象として一筆者）考える前に、その蘇生に関わっているということである。我々の毎日の「生」は、それらの現存のみで、我々をして、ある役割を（体系化された動的反応のメカニズムを通じて一筆者）演ずるように誘うところの諸客体の中で、展開されているということである。既に動的な諸傾向が、我々に蘇生の感情を与えるのに十分であるだろう。しかし急いでそういおう、そこには頻繁に別なものが加わると」⁽²³⁹⁾。

β 運動メカニズムの記憶と記録としての記憶の関係

いまの、現在の運動メカニズムの記憶に、頻繁に結ばれうる記憶として、過去の記録の仕方で残存し、そこからある仕方で蘇生する記憶がある。次には、この二つの記憶がどのような関係に立つのかについて、重要な記述が続けられる。「実際に、動的な機構が身体によって段々と、よく分析される知覚の影響の下で示される一方で、我々の心理学的な以前の「生」がそこにはある。それは残存する、一我々はそのことを証明するように努めるであろう一、時間において位置付けられるその諸事象の詳細すべてと共に、残存する。絶えず現在の瞬間の実践的で有用な意識によって抑制されている、即ち知覚と行為の間に張られている、ある神経組織の感覚運動性の均衡によって抑制されているこの記憶は、単に現在の衝動と同時的な運動の間に、ある断裂が発生するのを、そこにその諸様態（イマージュ）を移らせるために、待っているだけである。通常是我々の過去の経過を遡るためには、そして知られている、位置付けられている、人的な、現在に関わる「様態（イマージュ）－記憶」を発見するためには、我々が我々の知覚が仕向ける行為から、それによって抜け出すところの、ある努

(239) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.238 et suiv.

力を必要とする」。

更に、常に新たな現在における行為を、新たな状況に適切なものとすべき、運動メカニズムとしての記憶は、そのメカニズムに確かに進展において連なっているのだが、もはや役割を終えている既存の運動メカニズムを、過去の記録としての様態（イマージュ）の記憶へと確実に排除しなければならないのであるけれども、他面ではそのようにして、それに進展によって連なっている関係にある、既存の運動メカニズムを過去に排除するのであるから、機会があれば新たな行為のために蘇生しうる仕方ですれら様態（イマージュ）の記憶を、残存させてもいるとの事情（極めて説明しづらい事情）が、解りやすくはない文章で綴られている。「我々の知覚は、我々を未来の方へと押す。我々は（他方でその分だけ絶えず一筆者）過去に（記録としての記憶の内に一筆者）後退する必要がある。この意味において、運動はむしろ様態（イマージュ）を（新たに始められる行為・運動に、確かに進展において連なっているのであるが、もはや記録とすべき既存の様態・イマージュとして一筆者）遠ざけるであろう。しかしながらある面によって、（新たに始められる一筆者）運動はそれら様態（イマージュ）を（選別されて蘇生しやすいものになるように一筆者）準備するのに寄与する。なぜなら、もし我々の過去の様態（イマージュ）の総体が、我々に存続するままであるのなら（前述のように「生」は詳細を伴って残存するのだから一筆者）、現在の知覚に類似する表象が、可能的なすべての表象の中から選ばれる必要がある。成就されるあるいは始まりかけの諸運動が、（それに進展によって連なってきた諸様態だけの一筆者）この選別を準備する、あるいは少なくとも我々が収集するであろう諸様態（イマージュ）の分野を限定する。我々は、我々の神経組織の構築によって、その下で現在の諸印象が適合した諸運動に伸びてゆくところの存在である。：もし古い様態（イマージュ）が、同じくよくこれらの運動に伸びてゆくのに成功するなら、それらは現在の知覚に滑り込み、そしてそれによ

り同様の扱いをしてもらうために、その機会を利用するだろう。その際にそれらは、法上は（現在の知覚に滑り込むことで—筆者）現在の状態に覆われているままのほずであるように思われるのに、事実上は我々の意識に（現在の知覚に進展によって連なる、だが過去の様態・イマージュとして—筆者）現れる。それゆえに人は、機械論的な蘇生を引き起こす諸運動は、ある面によって（それに進展によって連なっている—筆者）諸様態（イマージュ）による蘇生を妨げ、そして他の面で助力する（新たに始まる行為・運動に連なっている諸様態として保存することにより、機会を捉えてのそれらの再生の機会増大に助力する—筆者）と云うるのであろう。原則として、現在は過去に取って代わる。しかし他方では、古い諸様態（イマージュ）の排除が、現在の行動によるそれらの抑制に由来するという正にその理由で、その形式がこの現在の行動に（連なることのゆえに—筆者）はめ込まれうるであろうそれら古い諸様態（イマージュ）は、他の諸様態（イマージュ）よりもより大きくない障碍に出会うであろう。そして、もしそのときからそれらの内のあるものが、障碍を乗り越えうるのならば、それはその障碍を乗り越えるであろうところの、現在の知覚と類似の諸様態（イマージュ）なのである」⁽²⁴⁰⁾。

γ 「記憶—諸様態（イマージュ）」が介在する蘇生

考察は次に、諸運動によってなされる自動的な蘇生から、記憶—諸様態（イマージュ）の介在を要求する蘇生へと、完全に移される。第一のものは、なんととはなしの（par distraction）蘇生である。第二のものは、これからみるであろうように、注意深い蘇生である。それもまた、諸運動によって始まる。しかし自動的な蘇生においては、我々の諸運動は我々の知覚を、そこから有用な諸結果を引き出すために伸ばし、そしてそのように

(240) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.241 et suiv.

して（なんとはいない自動性に進むがゆえに）我々を知覚された客体から徐々に遠ざける（前掲 α 参照）のに対し、ここでは反対に、始まる諸運動は我々を客体に、その諸輪郭を際立たせるために寄せ付ける。「そこから、『諸記憶－諸様態（諸イマージュ）』がそこで演ずる、優越した、もはや付従的ではない役割（前掲 [B]・(e) 参照）が生ずる。実際に、諸運動はそれらの実践的な目的を放棄したと、そして動的活動性が知覚を有用な反応によって引き継ぐ代わりに、際立つ特徴を描くために後戻りすると仮定しよう。その際には、現在の知覚に類似する諸様態（イマージュ）は、（即ち一筆者）これらの運動が、その形式を既に配しているであろう（前項 β 参照一筆者）それら過去の諸様態（イマージュ）は、規則的に、偶然的にではなく、（なんとはいしにではなく、その機会を捉えて一次項 [D] 参照・筆者）この鋳型に流れ込むに至るであろう—その参入が容易となるために、多くのそれらの詳細を、事実放棄するのは別として（後掲 [D]・(b) 参照一筆者）—⁽²⁴¹⁾。

[D] 第三命題（「様態－記憶」から運動への移行）の詳細な説明

(a) 脳と記憶に関する二つの仮説

ここでは記憶が、脳のある機能に過ぎないのか、そうではなく記憶は、他のところに探されるべきであるのかの問題に深くかかわって、現在の知覚に過去の様態（イマージュ）での記憶が、正しい仕方でのどのように加わるのかが、本格的に論じられる。「我々はここで、議論の本質的な点に触れる。蘇生が注意深い諸場合において、即ち『諸記憶－諸様態（イマージュ）』が現在の知覚に、正しい仕方に加わる諸場合において、知覚が機械論的に諸記憶の出現を確定するのか、それとも知覚の前に自発的に赴くのが諸記憶なのか？この問題に人がなす解答に、脳と記憶の間に人が確立

(241) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.244.

するであろう諸関係の性質が依拠する。実際にあらゆる知覚に、諸神経によって知覚中枢に伝達されるある衝撃が存在する。もしこの運動の、他の大脳皮質諸中枢への伝播が、そこに諸様態（イマージュ）を現させる現実的な効果をもつとすれば、人はどうか記憶は脳のある機能に過ぎないと主張しうるであろう。しかし、もし我々がここで、他のところでも同様に、運動は運動だけを生じさせること、知覚的な衝撃は単に身体に、記憶がそこに挿入されるある姿勢を刻印するだけであることを証明するとすれば、その際には物的な諸衝撃の効果のすべては、動的適合（身体に記憶を挿入させる姿勢を刻印する一筆者）のこの仕事に汲み尽くされて、他のところに記憶を探す必要があるだろう。第一の仮説においては、脳の損傷によって引き起こされる記憶の諸障碍は、記憶が損傷された部位を占めていて、それと共に破壊されたことから生ずるであろう。第二のそれにおいては反対に、脳の損傷は、我々の始まりかけのあるいは可能的な行為に関係し、しかし我々の行為にだけ関係する。あるときはそれら損傷が、ある客体に直面して様態（イマージュ）の想起に適切な姿勢（記憶がそこに挿入されるのに適切な姿勢一筆者）を、身体がとるについて妨げるであろう。あるときはそれらは、記憶の、現在の実在とのその接点を遮断する、即ち記憶の実現の最終局面を排除すること、行為の局面を排除することで、それらはそれによってまた、記憶が現在性をもたないように妨げるであろう。しかし、どちらの場合にも同様に、脳のある損傷は真実には諸記憶を破壊しないであろう」⁽²⁴²⁾。

(b) 知覚・記憶の蘇生と注意の関係

そこで先の第二の仮説が、採用されるのであるが、著者はその検証を進める前に、知覚は神経組織や脳の諸運動にだけ帰されるものではなく、

(242) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.244 et suiv.

我々が客体からの衝撃を我々の不確定的な（自発的選択可能性ある）行為との関係で反射させて、意識（精神）が得るものであるとする、既に表明している意識的知覚に関する自説を加えつつ、手短かに知覚の、注意（attention）の、記憶の、一般的な諸関係をいかに表象するのか、ある記憶が、いかにしてある姿勢にあるいはある運動に、段階的に（我々が通常考える以上に多くの諸段階を経て）挿入されるに至るのかを示すために、次の章（後掲V）の諸結論を幾分先取りして、説明を加える。

まず注意について、疑いないのは、それが本質的に知覚をより強くし、そしてその詳細を引き出す効果を有する点、それゆえその実質においては、知性的な状態のある増加に帰される点である。更に意識は、この注意による強度の増加と、外的な刺激のあるより高い力に由来する増加の間に、還元しえないある形式上の差異を確認すること、そして第一の形式の増加である注意は、内から生じていて、知性によって採用されているある姿勢を表していることも、疑いが無い。しかし、ここから曖昧さが始まり、その理由は知性的な姿勢の理念が、明確ではないからである。あるときは、その知覚を知覚とは別個の知性（intelligence）の視点の下に導くために、ある「精神の集中」あるいは更にある「知覚的な努力（effort aperceptif）」をいうだろう。あるときは、この理念を実質化して、脳のエネルギーの特別なある緊張を、更には受容した刺激に加えられるに至る、エネルギーのある集中的な消費をも仮定するであろう。しかしこれらの理論は、心理学的に確認されている事実を、我々にとってなおより不明確なある心理学的な用語に翻訳して、ある隠喩に戻っているだけである。

そのような隠喩的な理論に代えて、著者は、後になす確固とした各論的な検証で基礎付けられるはずの、総論的な体系において、知覚の、注意の、記憶の一般的な諸関係、およびある記憶がある姿勢にあるいはある運動に、段階的に挿入される仕方について、おおよそ以下のように説示する：実際に、我々が既に予感させていたように、注意は現在の知覚の有用な結果を

放棄するという、精神の後戻りを含むと仮定しよう。その注意の最初に、運動の抑制が、静止のある行為が、存在するであろう。しかしこの一般的な姿勢には、非常に早くより微妙な諸運動が、知覚された客体の諸輪郭をなぞる役割をもつところの諸運動が、接ぎ木される。従って注意は、諸知覚から生じうる諸運動のシステムを蓄積する、行為の自動性に向かわせる先の記憶では問題となりえなかった、客体の様態（イマージュ）を正確に把握するという、微妙なしかし消極的ではない、むしろ自発的であるという意味で積極的な仕事をなす。そのための諸運動は、諸記憶（souvenirs）を通じて、その目的が果たされるまで継続される。もし保持されているあるいは思い出されている様態（イマージュ）が、知覚されている様態（イマージュ）のすべての詳細を覆うに至っていないと思われるならば、記憶のより深くてより遠い諸領域に、ある訴えが発せられる。そしてその作用は終わりなく続けられえて、記憶がその知覚を補強し豊かにし、今度はその知覚が段々と発展させられて、そちらからある数の補強的な記憶を引き寄せる。我々の記憶は、順番にそれが新たな知覚の方向に投げる類似する様々な様態（イマージュ）を選別する。しかしこの選別は、偶然によっては行われぬ。諸仮説を暗示するもの、選別に君臨するより以上のもの、それは知覚がそれを通じて継続するところの、そして知覚と思い出される諸様態（イマージュ）とに共通の枠組みとして役立つであろうところの、客体の様態（イマージュ）をできる限り正確に模倣しようとする（手本としようする）—同時におよそ知覚や記憶から客体にはないものを排除する—規則に従った、諸運動である。

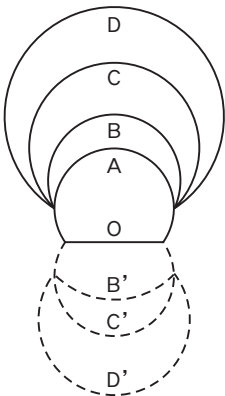
しかしその際には、人が明晰な知覚のメカニズムについて、人が通常的になすのとは別異に、表象する必要があるだろう。知覚は単に消極的に、精神によって受容された、あるいは更に確立された諸印象からだけなるのではない。精々そうであるのは、受容されると即座に消される諸知覚、我々が有用な行為に分散させる知覚である。しかしその分散を放棄するあ

らゆる注意深い知覚は、真実には言葉の語源的意味においてある反射（正確な反映）を、即ち積極的に生成された、客体と同一なあるいは類似する、その輪郭を模倣する（手本とする）に至る、ある様態（イマージュ）の外的な投影を前提としている。そしてこの段階で問題となるのは、客体そのものに関する写真化された諸様態（イマージュ）と、それらがその反映であるにすぎない、知覚に直接的に由来する諸記憶である。

しかし、客体と同一なあるいは類似するこれらの様態（イマージュ）の背後に、記憶において蓄えられた、そして客体とは単に連絡（関連性）をもつだけの他の様態（イマージュ）が、最後に多かれ少なかれ縁遠いある親近性だけをもつ、他のものが存在する。それらのすべてが、知覚との出会いに赴き、そして知覚の実質で培われて（引き寄せられて）、その実質とともに行為により外部化するために、十分な力と「生」を獲得する。こうして精神は、その注意深い知覚を通じて、現在の客体の知覚が自動的に生じさせうる運動システムを停止させつつ、しかしそのシステムに「様態－記憶」の内から入れ込む可能性のあるものを、選定するのであるが、その際には知覚された客体そのものを含むすべての要素が、客体と精神の間の回路において、相互的緊張の状態に置かれる必要がある。

この注意深い知覚において、反射された知覚はある回路であり、そこでは知覚された客体そのものを含むすべての要素が、ある電気回路におけるがごとく、相互的緊張の状態に身を保持し、その結果として客体から発したいかなる衝撃も、精神の深部において途中で止まりえない、常に客体そのものに返されるある回路である。この場合に、注意のある行為は精神とその客体との間のある牽連性（solidarité）を含み、それはより上級の集中の諸状態に移るためには、完全にそれだけ多くの新たな回路—最初のものを含み、知覚された客体だけをそれらの間の共通なものとしてもつ—を創設しなければならないほどに、非常に良く閉じられた（現在の客体に対する運動システムに入れ込みうる「様態－記憶」を選定するという同一の目

的によく限定された), ある回路である。より先で研究されるであろう記憶へと移されたこれら知覚の異なった円の, 最も狭いAは直接の知覚に最も近い。それはその客体Oを覆いに立ち戻る, 由来する様態(イメージ)と共に, 客体そのものだけを含む。その背後で段々と大きな諸円B, C, Dが知的拡大の増加する諸努力に応える。後に見るであろうように, 客体の知覚との関係で, これらの回路に入るのは記憶(mémoire)の全体である。なぜなら, 記憶は常に提示されているのだからである。しかしその弾性が無限にそれ自体を膨張させようとするところの記憶は, その客体に関してある増大する数の想起される諸事物を反射する。その記憶は, あるときは客体そのものの詳細を, あるときは付随する詳細を明確化するのに寄与しうる。そのようにして, 知覚された客体を独立なある全体の仕方



で再構成した後に, 我々はそれと共にそれがそれらとあるシステムを形成しているところの, 段々と遠い諸条件を再構成する。その客体の背後に位置付けられる増加する, そして潜在的に客体と共に与えられえている深さのこれらの条件を, B', C', D'と呼ぼう。人は, 注意の進展が新たに知覚された客体だけでなく, それが結びつきうる段々と広い諸システムを生成させる効果をもつと知る。;その結果として, 諸円B, C, Dが記憶のより高い拡大を示すにつれて, それらの反射はB', C', D'において, 実在性のより深い層に達する。それゆえ, 同じ心理学的な「生」が, 記憶の相次的な諸段階で, 無限な数の回数で繰り返されるであろうし, また同じ精神上の行為が多く異なる高さでなされる。注意の努力において, 精神は常に自己の全体を与えるが, しかしそれがその進展を完成させるために選ぶ水準に従って, 単純化しあるいは複雑化する。我々の精神の方向付けを決定するのは, 通常的には現在の知覚である。

しかし我々の精神が採用する緊張の程度に従って、それが身を置く高さに従って、この知覚は我々においてあるより大きな数のあるいはより少ない数の「様態（イメージ）－記憶」を引き寄せ（²⁴³）。

結局のところ、「様態－記憶」が行為として現実化されるためにはまず一方で、あるいは我々の身体的な姿勢の偶然的に正確な確定が、それらを引き寄せたり、あるいはこの姿勢の確定そのものが、それら様態－記憶の現われの気まぐれに、自由な領域を偶然に残したりしていなければならない（知覚による偶然的な身体的姿勢の確定に、「様態－記憶」を代入させるだけの余裕がなければならない）。他方で記憶の方では、自発的な注意により、現在の知覚に入れ込みうるような「記憶－様態」が自発的に確定されていなければ、単なる夢想の記憶ではなくなって、現実化される可能性はない。その記憶が非常に良く現在の知覚にはめ込まれて、人が知覚が終わるところで、その知覚の記録としての記憶が始まるといえないほどの瞬間が到来する。正にこの瞬間に記憶が、気まぐれにその諸表象を現させたり消させたりする代わりに、身体の諸運動のメカニズムの詳細を模範として、機械論的にしかし自発的な選定を通じて外部化されたことになる。

従ってこれらの記憶が、更に運動に、そしてそのことにより更に外的な知覚に近づくにつれて、その記憶の作用はあるより高い実践的重要性を得る。すべての詳細を伴って、ありのままにそしてそれらの感情的な色合いにまで再現される過去の諸様態（イメージ）は、夢想のあるいは夢の様態（イメージ）である。我々が作用すると呼ぶもの、それは記憶が次第に自らを収縮し、むしろ自らを鋭利にして、身体の行為を通じてそれが貫くであろう経験に、その適用可能性を確保するために薄片の刃だけを提示するまでになるのに、到達することである。基本において、人が諸記憶

(243) Bergson, Matière (前掲注161参照) p.245 et suiv.

の想起における自動的（自由な）なものを、あるときは無視し、あるときは誇張してきたのは、記憶の前記のような動的な要素をここに識別しなかったがゆえである。

我々の考えでは、我々の記憶の活動への訴えが最初に投げかけられるのは、我々の知覚が自動的に意識による模倣運動（運動メカニズム）に解体された、正にそのときである。その際にはある下絵が、我々がそこに多かれ少なかれ遠い記憶を投影して、その詳細と色合いを再創造するところの下絵が、我々に供給される。しかし、人が通常的に物事を考えるのは、そのようにではない。あるときは人は、記憶の行為への適用可能性を顧慮することなく、精神にある絶対的自動性を与える。人は精神に、それに気に入るように、現存するあるいは現存しない客体に対して働く力を与える。人はその際には、感覚運動（知覚とそれが生じさせる運動）の均衡の最小での混乱によって、注意と記憶にもたらされるところの深い障碍（妨げ）をもはや理解しない。あるときは反対に、人は想像的な（imaginative）諸プロセスを、現存する知覚の機械論的な同数の効果とする。人は、必然的で統一的な進展によって、客体が諸感覚を浮上させ、そして諸感覚がそれに牽連する諸理念を機械論的に浮上させることを望む。その際には、最初に機械論的である現象が、途中で性質を変えるための理由は存在しないから、人は知的諸状態がそこにつきもり、眠り、目を覚ますところの、脳の仮説に到達する。どちらの場合においても、人は身体の真の機能を無視し、そして人はあるメカニズムの介在が、何において必然的となるのかを理解しなかったので、人は一層に一度そのメカニズムに訴えたときに、人はそれをどこで止めるべきなのかを理解しない⁽²⁴⁴⁾。

(244) Bergson, *Matière* (前掲注161参照) p.251 et suiv. これまでの考察から結論として、我々の自由な行為は、現在において周辺部からの衝撃により、脳が始まりかけの運動システムとして用意するいくつかの中から、精神が注意を通じてそこに入れ込みうる記憶を選定して、現在において実現するものであるということになる。

ここには、ベルクソンが確立しようとしている二元論哲学の、総論的な輪郭が既に浮かび上がっている。

(未完)

更にまた、その精神が有する記憶は、常に新たに生ずる現在への一貫した（不可分な）時間の形式（純粹持続の形式）において、各人が自由に（創造的に）生きてきた記録の性質をもっていなければならないことも、これまでの考察から当然の前提となしうるであろう。